
IS インフィニット・ストラトス～ツインドライブの使い手～

Thalys-hiiragi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス〜ツインドライブの使い手〜

【Nコード】

N6009V

【作者名】

Thalys-hiragi

【あらすじ】

アホな神様のせいで転生する羽目になった男、赤城 翔は新たに赤城Ⅱポルシェ・翔と言う名前となりIS インフィニットストラトスの世界にの飛ばされる事となった。

主人公は準最強、原作の順番？無視します、でも一応まともな作品に仕上げるつもりです。

※若干キャラ崩壊してます。苦手な方はご遠慮ください。
とっても

原則的に毎週日曜日更新。1週間が変則的になると変動あり

設定情報（前書き）

プロローグは次回からです

ここは設定のページ

物語では最初からある設定で説明の入らない物の説明ページです

設定情報

主人公プロフィール

氏名…赤城Ⅱポルシェ・翔 (AkagiⅡPorsche・Kakeru)

血縁…ドイツ系イギリス人と日本人のハーフ

イメージカラー…エカルラート (スカーレット)

容姿…欧州人的な肌を持ち、肩まで伸ばした銀髪が特徴。瞳の色は翠色。

年齢16歳

身長168cm

体重55kg

誕生日…04/02

出身 日本?

住所 不明

所属 篠ノ之ラボ テストパイロット

IS適正…S

使用するIS

・ブラックバード (形式…FX/SR-71/BT) (第4・5世代IS)

・ミラージュ ランサーF1 (形式…FX/G2/CR-200) (第3世代IS)

通称「ツインドライブの使い手」

※ツインドライブは2つのISを「組み合わせて使用する」という意味

ISの独自設定についての解説

・世代について

第4世代

白式や紅椿など数機が稼働するにとどまるが実戦での戦闘力はかなりの物

第4・5世代

現状で世界にブラックバードのみで一機しか存在しない。第4世代以上の性能を持ったため主人公である翔が勝手に位置づけたもので第4世代との決定的な違いは燃費性能、拡張領域バススロットの大容量化など従来のISからの変更点は500カ所以上にもおよび第5世代と言っても過言でない。

表記

・初登場時のみ「ブラックバード（FX／SR－71／BT）」と記す

・以降は「ブラックバード」と記す

何故に形式があるのか

・翔がかっこいいと思ったから神様が勝手に付けていた形式をそのまま使用してるだけ

ACT. 00 「始まりはプロローグって言うらしいぜ」 (前書き)

とりあえず転生までの話です。

本筋は本編は次回からで

ACT. 00「始まりはプロローグって言うらしいぜ」

コレを見ている皆さんは死について考えたことがあるだろうか？

まあ作者も含めて体験したことは無いと思います。

僕は死にましたが・・・

「何で死んだかって？そりゃおまえの不注意だぜ」

だれ？この魔法使いみたいな子は

「あたし？あたしは神様だぜ！」

神さま？どこが？

「どこがとか言うなあ！」

ごめんね、ちょっちょっとまって！？痛い殴らないで・・・

（中略）

「さて、早速だけど貴方・・・名前覚えてる？」

僕の名前？赤城Ⅱポルシェ・翔だけど？

「覚えてんだ・・・童顔のくせに」

覚えておいてほしくなかったような口ぶりですね、自称神さま。あ

と童顔は余計だ・・・。

「だって、あたしが名前を考えられるからだぜ！」

ああ・・・そーですか・・・

「さて、これから君は次の世界に飛んでもらうんだけど・・・」

いきなり!？

「なんか文句でも？」

別に、無いけどさ、俺が死んだ原因とかそのほかは？

「ん、今回飛んでもらう世界は・・・」

俺の話は無視？

「はいはい、翔の死因はな・・・飛び出してきた猫を轢きそうにな
って避けたら追突されて死んだんだぜ! まああたしのミスで天国に
行くはずがいけなくしちゃったんだぜ!」

その決定はもう覆らないみたいですね

「まあ過去のことを気にするような事はこの先起こらないと思うけ
どな」

心配になって気た・・・でも結局は気にしたら負け!？

「そう言うことだぜ! とりあえず、異変が起きてるところに行つて、

そこで問題を解決したら適当なところまで生きられるように措置は執ったからノープログラムだぜ！」

やっぱりあんたの頭が心配だ……

「さて、今回行ってもらう世界はISの世界だぜ！。あ、ここでクルマネタとか出してもダメだぜ！もうそのネタ知ってるから」

ISってどんな世界だ？be動詞だから3人称？

「どんな理解の仕方だよ……インフィニット・ストラトスだぜ！」

ランチアの新型ストラトス？

「へいへい、天然て言われる？それともわざと？」

しらね

「仕方ないな、とりあえず簡単に説明するぜ。」

女性にしか反応しない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス（IS）」の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し女尊男卑が当たり前になってしまった時代。

織斑一夏は、自身が受ける高校の試験会場と間違ってIS操縦者育成学校「IS学園」の試験会場のISを起動させてしまいIS学園に入学させられる。

「世界で唯一ISを使える男」である彼はIS学園の生徒たちにとって興味の対象。さまざまな出会いや再会を通し、一夏の前途多難な日常が始まる。

「とまあこんな感じだぜ」

読んだのは俺だけだね、でもコレだと入り込む余地無いよね？

「ふっふっふ・・・そこはあたし神さまだから」

もうどうにでもなれ・・・

「と言うことで、翔の相棒を作ろう」

あー・・・そのISってやつ？

「そうそう」

女にしか反応しないんでしょ？俺男だけど？

「だから？あたしは神さまだぜ！」

はいはい、そーですね

「とりあえず、翔の愛車から名前をもらってBlackbirdだ
ぜ！」
ブラックバード

俺は医者じゃないけどね・・・というか俺のバイク・・・

「ちなみに向こうじゃ高校生から排気量制限なしでバイク乗れるから問題なく走って良いぜ！」

マジで!?

「ブラックバード（開発コード…FX／SR－71／BT）は第4.5世代のISにしといたぜ」

基本資料だと第4世代までしかないけど？

「新しい方が良いだろ？」

まあね……

「それからブラックバードには管理人格がいてな」

「初めましてマスター、私はBlackbird Auto Control System、略してB.A.C.S.（ボックス）と呼んでください」

ちょいちょい神さま質問！

「なに？」

ISはみんな管理人格を持っているわけ？

「私をそこいらのコンピュータのAIと一緒に考えてほしくはないです、私はISの頭脳そのもので私はISの意志です」

「普通はいないぜ！翔だけの特別装備！いまならキャッシュバック！」

なんじゃそりゃ……

「とりあえず、もう一つISがお前に渡るようにしておいてやるぜ！もしかしたら有効活用できるかもしれないからな！じゃあいつてらっしゃーい」

僕の視界は暗転した

「で、ここは何処だ？」

暗転した視界が元に戻ったのはすぐのことだった。

たぶんどこかの上空と言うことは確か
そう落ちていた・・・それもえらい高さから・・・多く見積もって
50メートル

「ブラックバード！」

ブラックバードの待機状態は腕時計だった

「展開します」

俺の左右に黒い装甲が展開されていく

「展開完了。システムチェック、全システムオールグリーン、異常ありません」

思い切り俺は制動をかけた

「とまっ・・・た？」

地上スレスレで停止

「お見事です、マスター」

初期動作では高速域からの制動、また補助的な意味で自動的な制動がかかっていた。
と思う

しかしここは何処だ？

どこかの高校（もしくは大学）の入試会場のようにも見て取れるが・
・・。

「おい！そのIS操縦者！」

声をかけられた・・・うわー、なんか似たようなカッコした人が
いっぱいいる・・・

「GPS補足、現在位置を表示します」

そう、場所は最悪だったな。何せその場所とは

「IS学園だ？」

ACT. 00「始まりはプロローグって言うらしいぜ」(後書き)

とりあえずプロローグを上げましたが実はこのプロローグ、結末が2つあるウチの後から考えた方なんですネ、もう修正効かないけど
ww

とりあえずこんな感じの主人公視点で書いていきますよ
まあ時々誰かの視点で書いてみるのも良いですね。
では第1話でまたお会いしましょう

ご意見ご感想をお待ちしています。

ACT・01「入学試験（通過儀礼）」

まあその後IS学園での精密検査（というより実験動物扱いだけだな）で1ヶ月ほどこの学園で過ごしたわけだけど・・・。

結局、俺はそのIS学園にほぼ強制入学させられてしまった。

理由？そりゃあ男でISを運用できるから。俺の横にいる織斑先生の弟である織斑一夏と同じくね。

「赤城、お前には一応この学園の入学試験を受けてもらう。なに通過儀礼とでも思ってくれて良い」

なんとまあ、俺はさっさと負けて入学できない方向でお願いしたいけどね織斑先生。

「拒否権はないみたいですね。ブラックバード、展開」

「了解しました」

まあ外見は飛行外骨格（飛行可能なパワードスーツ）のようなものだな

相手はこの学園の教師か・・・

「そうだ赤城、一つ言っておくが・・・手を抜いていたらすぐに分かるからな」

本気でも出せとおっしゃる？そーですか、だが断る・・・なんて言えないよなあ。

「はじめ！」

織斑先生の合図で俺は一気に間合いを詰める

「Engage」

頭の中で戦闘スイッチが入った

速攻でカタを付ける！

「ワンオフ・アビリティー。使用可能です」

「Dive and Zoom（一撃離脱戦法）で終わらせる」

瞬時加速で一気に上昇する

そして単一仕様能力解放
ワンオフ・アビリティー

「きつ消えた！？」

俺の単一仕様能力である「漆黒ノ霧」は相手のセンサーの有効範囲内でもセンサーを反応させず、視界からも見えなくなるという能力

「こんな戦法は嫌いだけど・・・そんな事言ってられないか」

「RDY GUN」

シールドバリアーを破って速攻を決める・・・。

「FIRE」

毎分1万発上のRM61A1レールバルカン、勝負は1秒以下で終わる。

見えない攻撃は怖いよね。

「戦闘所要時間…3分12秒、損害なし、MISSION COMPLETE」

「作戦終了、展開解除 RTB」

とまあ、コレが俺の初戦だった。

IS適正は「S」

「まったく・・・おまえほどの適正があってあまり入学に乗り気でない者は初めて見たぞ」

織斑先生、普通はそうだろうけど俺の境遇考えてほしい物です

「男でISを使用できるのは2人だけ・・・でしたっけ？目立つのはごめんですから」

目立ちたくないというのが俺の本意であって入学とか・・・マジで神様恨むぜ・・・。

「その話はおいておくとして。今日の用件だが、おまえに荷物が届いてる」

いやこのコンテナは荷物ってレベルじゃないぜ

差出人は篠ノ之 束

「これは・・・」

「お前専用のデータ取りISとしてに、たば・・・篠ノ之博士がおまえのIS補助用にと専用制作したそうだ。もちろん通常の起動手順を踏めば普通のISとしても機能する」

篠ノ之束博士、ISの発明者である。1人でISの基礎理論を考案、実証し、全てのISのコアを造った自他共に認める「天才」科学者。製造したISは467機にとどまる。

「ミラージュ・ランサーF1（FX／G2／CR－200）・・・」

ブラックボードには第二形態になるための機能が欠如しているらしい。それを補う機能を持ったのがミラージュだという。

「専用機持ちの上に2機も保有とはな」

織斑先生は呆れているけど、俺だって好きで持つてるんじゃないかな？

「ミラージュは基本的に私と同じシステム構造をしています、私と決定的に違うのはこうして貴方たちとコミュニケーションをとれない事です」

「僕の分析だと君はISの深層意識を具現化した存在だとおもうけどね」

「私としてはコレが普通なのですが？」

そうでしょうね、でも

「君は普通のISじゃないじゃない」

「とにかく、おまえには入学までの1週間でコレを必読してもらわなくてはいけない」

出されたのは分厚い本で恐らく広辞苑くらいあるぞ？

「コレを、全部ですか？」

俺はISの基本知識は皆無だからなあ・・・

「当たり前だ、いくら実技で高得点を出しても頭がついてこなければ意味がない」

パラパラとページをめくるけどさ、辞書って言うか電話帳って言うか・・・あり得ない情報量だよ？

「とりあえず暗記しておきます」

何故かめくっただけで内容が完全に頭に入っていた・・・
あの神様が俺に高い記憶能力を付けたのか？・・・無いな・・・。

その後まあそのほかIS学園での俺自身への調査があるため世間への公表は控えられたが、入試会場でISを動かした男として俺以外にも一人、すごいことになっている男が居た

「織斑一夏か・・・とんだ貧乏クジを引いたみたいだな」

第2話へ続く

ACT. 01「入学試験（通過儀礼）」（後書き）

プロローグを書いた後に修正しまくった第1話です。

とりあえず1日目だけですごい話数になりそうww

ご意見ご感想をおまちしています

ACT. 02「IS学園入学」

入学初日

俺のクラスには重苦しいというか異様な雰囲気が漂っていた
それもそうだ。

だって、俺ともう一人織斑一夏は世界で一番不似合いな場所に居る
のだから。

ここは世界で唯一のIS操縦者育成用特殊国立高等学校。操縦者に
限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園
で育成されるらしい。

前にも言ったがISを操縦できるのは女性のみという事になってい
る中、1年1組には男子生徒が居るのである・・・それも2人
でも・・・メカニック課程には男子生徒が居てもおかしくはないよ
ね？

後で織斑先生に聞いてみるか。

ため息が出そう・・・いやもう出てるというか・・・。

「きつい・・・」

「だるい・・・」

上は織斑君、下が俺

しばらくして副担任の・・・あ、あの人俺が撃墜した人だ

「皆さん入学おめでとう、私は副担任の山田 真野です」

入ってくるときに俺を見て一瞬硬直したような気がするがまあいい
か。

クラスの雰囲気？そりゃあ明るく挨拶をしてくれた山田先生には悪

いけど重いままだよ俺は珍獣じゃねえ・・・

「きよっ今日から皆さんはこのIS学園の生徒です、この学園は全寮制。学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って楽しい3年間にしましょうね」

さつきからずっとだけどさ、俺と織斑君に視線が集中・・・。

「じゃあ自己紹介をお願いします、えっと出席番号順で・・・」
出席番号順!?

読者の皆さん、俺の名前をご存じだろうか?と言うか覚えてるよね?覚えてもらえてないと泣くよ俺・・・。

俺の名前、赤城Ⅱポルシェ・翔。

A行の上に次は力行なので相原とかそう言う名字が来ない限りは90%の確率で出席番1番となる。その状況が今である。

「では、赤城君・・・お願いします」
起立して

「赤城 翔です、よろしくお願いします。趣味は読書です、人見知りはないタイプなんで気軽に話しかけてくださいね」

当たり障り無いだろ?普通に済ませたつもりだけど無駄に注目はされてるな・・・仕方ないけどね。

織斑君は上の空だな

というかこの状況で上の空は危ないぞ、織斑君、甘いよ、甘すぎる、世界一甘いというトルコデザートよりも認識が甘い!

「織斑一夏君?」

山田先生が織斑君の番になったことを教えてくれてるんだけど気がついて無いみたい。

「はっはい！」

飛び上がるように驚くとは・・・

「大声だしちゃってごめんなさい、でも「ア」から始まってもう「オ」なんだけど、自己紹介してくれるかなあ？だめかなあ？」

うわー・・・山田先生の顔ちけー

「いやっ・・・そんなに謝らなくても・・・」

居心地悪そうと言うか言葉に困るというか・・・あの状況なら俺も
だけど

「私が居ることをお忘れではないですよ？」

「そりゃあね・・・でも今はしゃべらないこと」

超小声でボックスに命じた

「えー・・・えっと、織斑一夏ですよろしくお願いします。・・・」

俺以上に注目されてるな、経験からしてそこでそれ以外何か言わないと後が大変なことになるぞ、

織斑君は俺を挟んで反対側の女子を見て助けを求めるような目をしているが・・・そっぽ向かれてる。

なにか自身の中で結論に達したのか深呼吸のあと・・・

「・・・以上です！」

言い切った！？

俺は机に突っ伏したしほかのクラスメイトはズッコケた。

「え？あつあれ？ダメでした？」

戸惑う織斑君に近づいたのは俺の試験監督をしていた織斑先生・・・あれ？織斑？

バコン！

鋭い出席簿攻撃？・・・アレは痛そうだ

「げっ！？千冬ねえ！」

さらにもう1発追加

「学校では織斑先生だ」

あー家族というかお姉さんなんだ

「諸君、私が担任の織斑値冬だ。君たちヒヨッコを1年で使い物にするのが仕事だ」

担任の挨拶のあとは黄色い歓声・・・

「お姉さま！もっと叱って！罵って！！」

前途多難だし・・・あとはご想像にお任せするとして・・・中略！

「諸君らにはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらう、その後実習だが基本動作は半月で体にしみこませろ、いいか？いいなら返事をしろ、良くなくても返事をしろ！」

もちろん一同（俺は適当にだけど）気合いの入った返事が帰った。

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。ハイパーセンサーの採用に

よって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。

そしてISは女性にしか動かせない。

休み時間・・・

「織斑君だよな？」

しかし周りの視線を見ると注目度は抜群だな

「あ・・・ああ、えっと・・・」

やっぱり自己紹介は聞いてなかったか

「赤城 翔です、よろしくね。織斑君」

「一夏で良いよ、えっと赤城さん？」

さん付けかできれば君付けにしてほしい

「翔で良いよ。名字で呼ばれるのは好きじゃないから。にしても大変なところに来きたな・・・俺もだけど」

俺はともかく一夏は才能だろうけど

「まあ、少ない男だし、仲良くしようぜ」

そしてもう一人黒髪のポニーテールの女子が

「ちょっと良いか？」

さっき自己紹介の時に一夏から目をそらした人だった

「え？」

俺は居ない方が良さそう・・・俺も流れ的にというか一夏に連れ出されたんだけど、屋上に呼び出された

俺としては気まずいよ？

「何のようだよ？」

やっぱり知り合いだったのか

「うん・・・」

言葉が詰まってるのは俺を意識してか？

「邪魔者は消えようか？ 積もる話とかあるだろうし。その辺で油を売ってくるよ」

そう言っただけ俺は屋上の端っこに急いだ

「いや、私と一夏はそう言う関係では・・・」

そう言う・・・誰だっけ・・・えーっと篠ノ之さんだったな、篠ノ之さんを振り切った。

二人から離れて声が聞こえない程度の距離まで来てから俺は待機状態のバックスに話しかけた

「バックス、異常は？」

「ありません、空間受動レーダー共に静かです」
特に変わった様子は無いようだけど・・・いや、建物の陰に多数の女子が居ることをのぞいてはね

「分かった、監視モードのまま続けろ」

「了解しました、マスター」

マスターって・・・あんまり響きの嫌いだ・・・マスターとスレイブみたいな主従関係的だからかな？

「バックス、俺を呼ぶときに何が一番適正だと思う？」

「マスターが適正だと思いますが、変更されたいのですか？」

「名前で呼んでくれ。堅苦しいのは嫌いだ」

昔からそうだったからな・・・

「了解です、翔」

こっちの方がじっくり来るね

「にしても、あの二人は何だ・・・まるで数年ぶりに元恋人にあっ
たような・・・」

「翔、それ以上は・・・」
ボックスに止められた

キンコーンカーンコーン・キンコーンカーンコーン

1時間目 教科…IS基礎理論

とりあえずまだ例の必読書に乗っている内容からしか出ないのか・
・いや待てよ教科書は暗記しておいた方が良いな。

「ではここまでで質問がある人？分からないところはどこかありま
すか？」

一夏は・・・顔が青白いぞ？

「織斑君？何か質問はありますか？」

山田先生は優しい人だな・・・ぶっちゃけ一夏にとってはどうか分
からないけど俺にとってはわかりやすく解説してくれて良い先生だ
と思うよ。

まあ一夏の答えは恐らく先生の予想の斜め上に行く答えだったけどね
「ほとんど全然分かりません・・・」

まあ調べによると男と女ではISに関して全くと言って良いほどカ
リキュラムの作り方が違うのだそうだな。

確かに十数年間分の差は大きいよな。

「ほとんど全部ですか！？・・・今の段階で分からないって言う人
はどのくらいいますか？」

山田先生は哑然

まあ俺は基本的にあの本に書いてあったことなら答えられるけど・
・。

手は上がらない

教室の入り口の方で静観していた織斑先生に近寄って

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

参考書Ⅱ例の必読書ね

「えーっと、電話帳と間違えて捨てました」

バコン！

織斑先生の強烈な一撃

アレは痛いぞ、絶対に痛いだって角だもんあの「黒くて平たい以下略」の角だから

「あとで再発行してやるから、1週間以内に覚えろ、いいな」

さては俺に一夏のフォローをさせるためにあの神様は俺を送ったな・

・

第3話へ続く

ACT. 02「IS学園入学」(後書き)

第2話でした。

書きためた物を出しているのですが土壇場で修正するとは・・・
1話分書いたら掲載という感じにしています。

ご意見ご感想をお待ちしています。

ACT. 03「長い1日目は終わらない」

次の休み時間

俺は一夏のフォローとすべてのテキストを暗記するために俺と一夏の机に本の山を作っていた

「そう、だからシステムのこの部分を使用してPICやMARを制御するわけ、モーショントレーサーは独自のシステムを持っている場合があるね」

俺？即席教師って所かな

「じゃあこれは・・・えーっと」

早速基礎知識で転びそう・・・

そこに現れたのは金髪のクラスメイト・・・まあ俺も髪の色は銀だけれどさ、珍しいよね日本だとあんまり見ないし

「ちょっとよろしくて？」

この状況を見ろ・・・と言いたいけど

「よろしくないのので後にしていただけますか？」

誰だか知らないけど・・・お偉いさんところの人だったらやだなあ・

「この私が話しかけているというのに・・・それ相応の態度という物があるのではないかしら？」

貴方が誰なのか知らないし

「ごらんの通りこの山をどうにかしないと一夏が織斑先生からどんな仕打ちに合うか分かったものではないので・・・無礼を承知の上

でこのような態度を取っているのです、申し訳ありません」

あー、思い出した、セシリア・オルコットさんだなイギリス代表候補生の人だ。

「まあ、その無礼は許して差し上げましょう」

とりあえず例文通りの謝罪をしておいて

「一夏、この人知ってる？」

オルコットさんに聞こえないように一夏に効いてみると

「俺は知らない、翔は？」

自己紹介をちゃんと聞いていなかった証拠だな

「名前だけは知ってる」

俺はとりあえずこの人を追っ払わないと一夏の勉強に支障が出ると判断したんでさっさと話を済ませてもらいます。

「では、少々勉強の時間を変更します。ええっとオルコットさん・・
・でしたよね？ 赤城Ⅱポルシェ・翔と申します、以後お見知りおきを。」

「あれ？ 翔ってミドルネーム持ってるの？」

そうだ俺、自己紹介で説明はスルーしてたね。

「そうだ、説明してなかったね俺は、多分ハーフだから。イギリスと日本の・・でも今自分がどっちの国籍なのか分かってないというか、記憶もない、身内もない、戸籍も見つかない、無い無いづくしなんだ。知ってるのは相棒が居るのと自分の名前だけ」

そう言っ
て俺は腕時計^{バックス}を指さす

「そうなのか・・・悪いこと、聞いちゃったな」

二人は申し訳なさそうにしている・・・というか俺としてはここでこんな話をしてしまうとは・・・。

「申し訳ありません・・・」

暗いよちよつと？俺の身の上話を聞かせたから？

「気にするなって、俺が自分の意志で話したんだ」

この世界の常識は俺にとっては常識じゃないからな

キンコーン・キンコーン

授業が始まりそうなので山を片付けてオルコットさんにはご自分の席に行っていたいただいた

「良かったのですか？」

「良いんじゃない？別に隠せとは言われてないぜ、それにお前だつてしゃべりたいだろ？」

「オルコットさんのデータを出してくれ」

「公表されているデータのみですか？」

「それ以外も出せる物はすべてだ」

あの人に言わせれば「ISが使える人間で自分を知らないなんてモグリ」っていいそうだしな。

第4話へ続く

ACT. 03「長い1日目は終わらない」(後書き)

今回は短めですね、次回はちと長めにします。

ご意見ご感想をお待ちしています。

ACT. 04「もうすぐ1日目終了」(前書き)

長いです、ちょっと原作とは変わっている部分が・・・

ACT・04「もうすぐ1日目終了」

次の休み時間一夏に拌み倒され勉強は寮に行ってからと言うことになった

というか・・・寮は2人一組の部屋だけど俺は一夏と同室か？

その日のLHRの時間に

「これより再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス代表を選定し、ISで戦う。リーグマッチである。

「クラス代表とは、そのほか委員会への参加や生徒会への参加、まあクラス委員と思ってもらって良い。自薦他薦は問わない、誰か居ないか？」

俺はどうするかな。自薦はないな。

「赤城君を推薦します」

はい？

「織斑君を推薦します！」

「赤城君を！」

冗談じゃないぜ・・・

「オルコットさんを推薦します」

俺がそう言った瞬間、クラス全員がこっちを向いた

「素人同然の一夏や自分より断然・・・適任かと」

少しの間が開いて

「ほかには居ないか？居ないのなら赤城、織斑、オルコットの3名を候補とする」

先生・・・そりゃ無いぜ・・・

さっき追っ払おうとしたのがあまり良い印象を与えていなかったのかオルコットさんの怒りが爆発した。

「決闘ですわ！誰が代表にふさわしいかどうか決闘です！」

一夏の場合は売り言葉に買い言葉だろうな

「いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい。翔も良いだろう？」
はあ・・・とため息をついて頷いた

正直クラス代表なんて重荷は背負いたくないんだが

一夏はやる気満々、意外と好戦的な性格だな

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いですの？」

「いや、俺がハンデをつけるためなんだが・・・」

この世界のパワーバランス考えてみると良い

「織斑君それ本気？」

「女が男より弱いなんてISができる前の話だよ？」

「女が男と戦争になったら3日で女が勝つって言われてるんだよー」
笑い声に混じってこんな声が聞こえた

「一夏、俺はハンデ無しでお願いしようとおもうけ・・・」（バコッ！）

織斑先生の出席簿攻撃・・・痛い・・・
と言うか目が怖いよ？

「お前は後で職員室に来い、連絡事項がある」
ちよっ正気？ハンデ無しで戦わせるわけ？俺は一応攻撃パターンとか知恵袋には入ってるけどもISは初心者だよ？

オルコットさんが何か言いたげだったけど織斑先生は

「勝負は次の月曜日に第3アリーナで行う3人は準備をしておくように」

決定事項を告げるのみだった

キーンコーンカーンコーン

LHR終了を告げるチャイムが鳴った。

納得がいかないぜ・・・ハンデ無し？初心者だぜ俺は・・・。

「赤城、やはり今で良い職員室まで来い」
連行？ですか・・・

職員室

「お前のハンデだが、ブラックボードを使用するな、ミラージュランサーF1を使用しろ、それだけだ」

「それだけですな？たしかにフォーマットやフィッティングもカットしてテストしてましたけど相手は代表候補生ですよ？」

そんな事だろうとは思ってたけど

「私としては不本意ではありますが仕方ありませんね」
ほら。バックスだって不満そうじゃないか。でも使用するなど言われたんだから仕方がない

「本来なら訓練機にでも乗せてやりたいところだ」
と言われてしまった

「ではこれだけなら自分は教室に戻りますが」
職員室の空気って好きじゃないし

「あー・・・まてお前に荷物が届いていることを忘れていた」

「荷物ですか？」
誰から？何か荷物が届く予定とか無かったし

「放課後引き取りに來い、これが荷物の概要だ」

荷物区分…大型荷物

重量…250?以下

寸法…2300×800×1250(?)

「でかい・・・IS使って運べとも言うんですか？先生・・・」

「自分で考えろ」

マジ!?

まあ呼び出しの後教室に戻って終礼。長い入学初日が幕を閉じた・・・

・。

「これが寮の鍵です」

放課後、山田先生に渡されたのが寮の鍵

1024号室と書かれていた

「一夏の部屋は・・・1025か」

もっとカードキーとかレーザーキーとかだと思ってたけど普通の鍵だね・・・

「お隣さんだな」

そうだね、でもね俺は元々IS学園に居たわけでその間済んでいたのが1024号室で今日の朝に移動するかもしれないからって理由でいったん荷物を持って出たんだけど・・・orz

さて寮に行こう

「待て赤城、お前まさか・・・さっきの話を忘れたわけではあるまいな？」

織斑先生・・・あんたどっから現れた!？

「例の荷物ですか・・・了解です、ごめん一夏。ちょっと時間かかりそうだ」

「気にすんなって、何なら手伝おうか？」

ありがたい申し出だけど

「いや、大丈夫だ。多分何とかなる」

学園本校舎裏に置いてあった荷物

木のカバーを外すと・・・チタンカラーのバイクだった

「CBR1100XX?・・・これはもしかして・・・」

俺の愛車だったバイクじゃないか？

オードメーター（総合距離計）は00005・3?||5・3?||新車である。

違うか？

「あと2日でお前の戸籍と運転免許証が発行される、それはお前の身元引受人から来たお前の荷物だ」

なんというか、連絡が来た身元引受人が神様だってことにびっくりだ、アフターサービスが何とかと言ってたぞ

荷物の中には一応必要な物が揃っている、ヘルメット・グローブ・対衝撃用ジャケット・・・etc.

「これは・・・」

販売証明書

受け渡し・・・1998／04／05

輸入・・・ドイツ仕様

購入者・・・Akagi||Porsche・Kakeru

「俺なのか・・・？」

戸惑っていると

「とにかく寮の駐車場に駐めておけ」

そう言っただ織斑先生は駐車場の場所を書いた紙を渡して行ってしまった。

キーをひねると残念なことに必要最低限の燃料しか入っていないように燃料系の針は力なく下にへばりつき赤いランプが点灯した

「押してくか・・・」

エンジンはかかるけど何処まで燃料が入っているのか分からない以

上押していくしかないな。

思ったより重いよこれ。転生するまでは重いなんて思ったこと無かったのに・・・筋力が変わったのかな？

「重いよ、乾燥重量（オイルやガソリンなど液体が入っていない重量のこと）で223？もあるんだもん・・・そりゃあ重いさ」と俺は絶賛涙目だ。

バイクを置いて寮の部屋に行くために廊下を歩いていると、一夏が部屋から飛び出してきた。

「あれ？一夏じゃん、どうしたの？顔色が悪いけ・・・ど・・・」

僕が言葉を詰まらせた理由？

ドアを突き破る木刀が見えたから

「一夏、君はいったい何をやらかしたんだ？」

そう言いつつ俺はカメラを取り出してシャッターを切った

カメラを何処で手に入れたかって？

さっきの荷物に入ってたデジタル一眼レフカメラだよ？

「頼む翔、助けてくれ！」

「涙目だね・・・」

「ちょっと待ってね」

問いあえず自分の部屋に行って荷物を置かないと

5分後

「さて、話を聞こうじゃないか」

問題の二人を僕の部屋に呼び間に僕が入った

要点だけ順を追ってまとめると

- ・一夏は部屋に行ったらルームメイトが居た
- ・そのルームメイトは幼なじみの篠ノ之 箒さんだった
- ・彼女はシャワールームから出てきてバスタオル姿だった
- ・箒さんは一夏と分かって木刀で襲ってきた
- ・一夏の部屋のドアは穴だらけ

と言うことになる

「まあ一概に一夏が悪いとは言わないけどね」

正直どっちもどっちだな

「一夏の真っ直ぐなその性格はかうとして、一夏も男なら適当なところで折れても良いと思うけどね」

もちろん一夏だけ話悪いとは言わないので

「篠ノ之さん貴方も貴方です。確かにショックでしょう、その心中はお察しいたしますが、見ず知らずの暴漢ならまだしも幼なじみでしよう篠ノ之さん？居合わせたのが僕ならばまだしも幼なじみの一夏ですよ？」

「だがそれでも限度という物が！」

「もちろん羞恥心を捨てろとは言いませんが、貴方が使ったのは木刀ですよ？一歩間違えば一夏が再起不能になるかもしれない傷を負わせてしまうかもしれない武器です。それをよく考えてくださいね」

「・・・」

二人とも黙り込んでしまった

「じゃあ寮監に直談判に行きます」

「「へ？」」

間の抜けた声だなおい・・・

「今後このようなニアミスがないように織斑先生に直談判しましょう。まあ元々俺も会いに行かなければいけない用事があったからそのついでさ」

で、結局

「無理だな、開いている部屋がない」

職員室で寮監を聞くと織斑先生だと言うことで聞いてみたのだが・

「それは、部屋の都合がつくまで待っていると言うことでしょうか？この場合しかるべき措置としては自分と織斑君を同室にするべきではないでしょうか？何かあってからでは遅いですよ」

普通に考えればそうだ、部屋割りで二人一組になるにしても男同士の方が良いはずだ。

「お前に部屋にもは諸般の事情により遅れていたルームメイトが明日来る。だから当分の間は無理だ」

「自分も織斑君と同じような生活と言うことでしょうか？」

それはそれで良いか・・・じゃなくて・・・それはあまり好ましくない

「いや、男だ。フランスから来るそうだ。データは渡しておいたはずだ」

男？3人目！？

「部屋にあったクリアファイルですか？」

「そうだ」

見てなかった・・・というか一夏の騒動の仲裁でそんなの読んでは暇なかったし。

「時間的余裕が無く見ていませんでした・・・」
ガンッ

出席簿って堅いんだよ？知ってる？でも一夏の時よりは少し軽い気がする。

「ところでお前のプロフィールは書いているのか？足りない部分を補充しておけと言っておいたはずだが」

「こちらになります」

赤城Ⅱポルシェ・翔の公式プロフィール

年齢16歳

身長168cm

体重55kg

生年月日 2010/04/02

出身 日本

住所 日本国IS学園 学園寮1024号室

所属 超天才篠ノ之ラボ テストパイロット

IS ミラーージュ ランサーF1(FX/G2/CR-200)

第3世代IS

「こっちがISの詳細ですね、篠ノ之博士からデータが届きました」

IS名…ミラーージュ ランサーF1(FX/G2/CR-200)

タイプ…電子戦対応型マルチロールタイプ

専用装備…Vランス(槍)

その他拡張装備…可変出力レーザー砲2連装

イプシロンMk.7…レールマシンピストル。単射もしくはフルオート。

RCSバーストシステム…超高精度指向性爆薬を使用して急激な方向転換を行うシステム。

「ふざけているのか・・・あいつは」

そう言って僕のプロフィールにある「超天才篠ノ之ラボ」の「超天才」に2本線を引いて消していた。

ちなみにそこは篠ノ之博士が書いたんであつて俺じゃないぞ。

部屋に戻ってきて

「申し訳ありません……」

俺の部屋は二人で使用する事が判明、部屋の用意ができるまではやはり一夏は篠ノ之さんといっしょになると言うことを俺は頭を下げながら伝えた

「いや、俺たちのためにそこまでしてくれただけで十分だ、俺の方こそ人任せにしちまってすまん」

「そうだぞ、むしろそこまでしてくれて私としてはうれしい」

とにかく僕は明日来る転校生？の受け入れのために荷物をまとめて整理しなければ

第5話へ続く

ACT. 04「もうすぐ1日目終了」(後書き)

今回はちょっと早いけどあの人(の名前)が出てきますよ
そして若干主人公が壊れます

ご意見・ご感想をおまちしています

ACT. 05「荷物整理してたら昔に無くした物とか出てくるよねっ..」(前書き)

今回は短めですね

ACT・05「荷物整理してたら昔に無くした物とか出てくるよね?」

荷物を片付けると言うか着替えとか神様が送ってくれなかったら買わないといけなかったな。

今はとりあえず学園が用意してくれた服と最初から着てたジャージにハーフパンツというラフなスタイルに着替えたよ、だって制服のままだとだるいから。

「ボックス。とりあえずシャルル・デュノア君のデータを出してくれ」

「了解しました」

デュノアって事はデュノア社と何か関係が?

「学園に通知されたデュノア君のデータはこれだけ?」

データがあからさまに少なかった、もう少しデータがあっても良いはずだ

「はい、それ以外のデータは見あたりません」

ちょっと彼のことを調べてみる必要があるそうだ。

「ボックス・・・フランス政府のデータベースにアクセスしてこの子のデータを出してくれ」

「はい、ただいま」

調べることには罪悪感はなかったけど、むしろ事実を知ってから罪悪感が僕を支配していた。

「これは・・・」

本名…シャルロット・デュノア、性別…女性。

フランス政府ではなくデュノア社のデータベースで行き着いた答えが「極秘」とされた資料の中にあった日本に出現した特異ケースの2名に近づくためにIS学園に男として潜入させるとの資料だった。

「織斑先生に報告いたしますか？」

「いや、ちよつと様子を見るよ、親が社長だからってここまでするとは思えない」

「了解です」

バイクと一緒に送られた段ボールには様々な物が入っていて

荷物の中にあの俺をここに飛ばした狂気の神様からの手紙が入っていた

「親愛なる翔君へ

やっほー！どーだいIS学園は？楽しんでるかな？楽しめるよね？

君なら！

さてと、今回この手紙を出したのには訳があるんだぜ。

翔をこの世界に送るときに話さなかったその世界に起きている問題についての話なんだぜ！

基本的にこの「世界」って言うの物は情報をベースにして構成されていてだな、詰まるところパソコンと同じ2進法でデータの書き換えができるんだ

まあ基本的には干渉できないはずなんだが誰かが干渉を始めてしまったようなんだ。

そこで君たち2人の出番で分けなんだぜ！ブラックバードには「インフォメーションダイバー」って言う機能があつて軽微な改ざんなら修復する能力を持たせてあるから使おうと良いぜ。

もし大規模な改ざんの場合は待機状態で「インフォメーションリカバリ」って言う機能を使用してくれ。早くて数ヶ月、遅くても数年で修正はできると思うから。
ダメなら連絡くれ、あたしが干渉して直す。

翔の友人　神さま　より」

と言うことらしい。

「俺にはさっぱりだ」

分からないぞ、つまり俺は一夏のフォローじゃなくて情報修正のために転生したのか。その前に数年って……。

「翔は記憶できていないのですか？」

「いや、もう文面は覚えた。俺は記憶できて理解に苦しんでるんだ」

「私としては理解しかねます」

君は機械だからね……。

「お疲れのようですね、シャワーを浴びることをオススメいたしますが」

「うん、そうしようかな」

ここのシャワーはいわゆるユニットバスのな物。

「今日は疲れたぜ……」

シャワーを浴びた後、髪を乾かしていると

「コンコン」

「はい？」

「翔？ 飯に行こうぜ」

一夏がご飯に誘いに来てくれたようだった

もう良い時間なんだね

「分かった、今行くよ」

第6話へ続く

ACT. 05 「荷物整理してたら昔に無くした物とか出てくるよねっ..」

(後書き

さて、原作から少しずつ脱線し始めてしまいましたw
ラウラが来るまでにちゃんと元に戻そうと思いますw

ご意見・ご感想をお待ちしております。

ACT. 06「3人目の男子」

一夏side

「翔？飯に行こうぜ」

もう一人の男子である翔は意外とつきあいやすい性格で良かったよ。

「分かった、今行くよ」

出てきた翔は・・・何というか昼間とは別人だった。

「どうかした？」

学校だとメガネをかけていたはずなのに今はかけてない・・・

「いや、なんつか・・・メガネ・・・」

してないと女みたいだな

「メガネ？今はコンタクトしてるんだ。メガネは度が強くて疲れるからコンタクトなんだ」

「そうなのか」

気まずいぞ、この空気は

「もし、女みたいって言ったら・・・」

かわいいけど目が怖いぞ！

「いっ・・・言ったら？」

何かを持つまねをして

「投げる・・・」

何を！？何を投げるんだ？

「そっ・・・そうか・・・」

「まあ、そんな非常識な人はいないと思うけど・・・ね」

俺の一日目は恐怖という言葉で締めくくられたのだった。

一夏side end

翔side

翌朝、僕は篠ノ之さんと一夏と朝食を摂っていた。

「箒、これ旨いな！」

篠ノ之さんとコミュニケーションを取ろうとする一夏だけど

「・・・」

完全無視の篠ノ之さん

「翔、これ旨いよな？」

俺に意見求める気ですかこの人!?

「旨いと思うよ、もっとも俺は別メニューだけどね」

朝食がバイキングだったため俺はパンにしていた。

メニュー…パン（食パン・菓子パンなど）×4・ミルクティー紅茶・サラダ・フルーツ（バナナなど）・ハム・ウィンナー・目玉焼き。

一夏たち？和食メニューでメインは焼き鮭だな

「そうだった・・・」

今更気がついた!?!ダメだ、俺の中で一夏の注意力がストップ安・・・。

「ねえねえ、あの子たちが例の子かな？」

「一人は織斑先生の弟さんだって、彼も強いのかな？」

「いいなー篠ノ之さんだけ一緒に食べられて」

「私も声かけてみれば良かった・・・」

など外野がつぶやいているんだけど一つ言いたい、こっちに聞こえてるよ。

「織斑君、隣良いかな？」

座席？あーそっか言ってなかったね

俺・篠ノ之さん・一夏（窓側から見て）

の順に並んでるんだ

声をかけてきたのは同じクラスの仲良し3人組、おい・・・一人制服じゃないのが居るぞ。

「へ？別に良いけど？」

「「よしっ！」」

3人は嬉々として座るけど、僕の隣はどんどん不機嫌に・・・。

篠ノ之さん、早食いは体に毒ですよ？

「わー織斑君て朝すっごいたべるんだー」

「男の子だね」

「そうか？翔だって変わらないし・・・」

そう言って一夏は俺の方を・・・その視線の先にいる篠ノ之さんを気にしてあげて！

「俺はパンだけだな・・・低血圧の性ってやつで朝食べないと動けないから」

俺の平均血圧？同年代の男性より結構低いらしい、詳しいことは説明されたけど気にしてなかった。

カタ・・・

「私は先に行くぞ」

篠ノ之さんはソソクサと食べ終わって席を立った

「ああ、また後でな」

「じゃあ俺も食べ終わったから行くわ」

最後のフルーツを食べきり俺も席を立った

気になることの真相を確かめるために

「篠ノ之さん！」

「ああ・・・赤城・・・君か」

言葉に詰まりまくりだな

「呼びにくかったら翔で良いよ、まあ赤城でもポルシェでも翔でも好きに呼んでももらえればいいよ」

篠ノ之さんて歩くの早いよ

「篠ノ之さんは・・・一夏のことが好きなのかな？」

「なっばっばばばばばば・・・」

なに！？地雷？これが地雷なの？いや待てむしろこれは照れ隠し！

「そーか♪やっぱり好きなんだ」

「ぐっ・・・」

真っ赤になって下を向く篠ノ之さん

「手伝いましょうか？」

「へ？・・・どうして・・・」

間の抜けた返事をする篠ノ之さん

「俺が手伝おうという結論を出したの理由は3つ。1、篠ノ之さんは一夏がほかの女子と話すと機嫌が悪い。2、篠ノ之さんは一夏の前で挙動不審である。3、それを見抜けない一夏は恋愛に鈍い可能性がある。結論、手伝うのが妥当」

まあ原作を分かって居るといいうのもそうだけどね（※うる覚えです）

「私は・・・私は・・・」

ふらふらと顔を真っ赤にしてどんどん早足になる篠ノ之さん・・・

暴走した蒸気機関車か？あの人は・・・と言うか競歩なら絶対に優勝できるぞ。

朝のSHL

山田先生が

「今日は皆さんに新しいお友達を紹介します」
昨日の人か・・・シャルル君だったかな？

ちなみに今日は入学2日目である

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。諸事情により1日遅れてしまいましたがよくお願いします」

男子だった。

それも

「男子！3人目の男子！」

「しかもウチのクラス！」

「しかも美形！守ってあげたくなる系の！」

騒ぐね・・・そんなにはしゃぐと

「騒ぐな、静かにしろ」

教室は織斑先生の一声で静まった。まさに鶴の一声だな

「今日はIS実習を行う、各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合」

「それから、織斑、赤城・・・」

ん？やけに尻すぼみだな

「「はい」」

「赤城、お前・・・本当に赤城か？眼鏡はどうした？」

あ、忘れた

「寮に忘れてきました。コンタクトがあるので支障はありません」

ほら、暴走した篠ノ之さんを直してたら時間が無くて・・・

「そうか、まあいい。お前たち二人はデュノアノ面倒を見てやれ、同じ男子同士だ。解散！」

さて一夏の時間もないだろうし急ぐか

「君が織斑君で君が赤城君？初めましてぼく・・・」

律儀にも挨拶してくれるのか・・・品が良いところの人は違うね心に余裕が・・・思ってた自分が悲しくなった

「ごめんね、この時間は挨拶どころじゃないんだ、男子は移動しないといけない、女子が着替え始めてしまうからね」

そう言って僕はデュノア君の手をつかんだ

「こう言うときに男だって事を残念だと思うよ、俺は」

一夏・・・君は女の子の方が良かったのか？

「聞かなかったことにしておく、それより急ごう」

廊下を出て真っ直ぐアリーナへ

「俺たちはアリーナの更衣室で着替えるんだ実習のたびにこの移動らしい」

ちなみに聞かされたのは今日の朝、SHLが始まる前だった・・・

「う・・・うん」

顔が赤いよ？デュノア君

「どうかしたか？そわそわしてるけど」

落ち着きがない・・・いやあれだけの男女比だと正常か？

「トイレか？」

一夏・・・

「それはデリカシーがないぞ・・・男子でもだ」

できれば更衣室まで一直線に行きたかったが・・・

「噂の男子発見！」

「しかも3人！」

マズイ、これはマズイ。実習までの時間がないって言うのに

「一夏、デュノア君、突っ切るよ!!！」

ここは人が集まらないうちに突っ切る方が吉だ

「いた!こっちよ!!！」

「者ども、であえ、であえ！」

ここはいったいいつから武家屋敷に改装したんだよ

「見てみて、赤城君とデュノア君が手をつないでる！」

「赤城君の銀髪も良いけど、金髪も良いわねえ」

勘弁してくれ・・・俺たちは授業に遅れる!!生命の危機になるんだ。

「あと2秒で右の通路に入る」

一夏が頷く

「行くぞ・・・」

デュノア君の手を取って走り出す

廊下は走るなど書いてあるが気にしないで走る

「あ、逃げた！」

「追いかけるのよ！」

ふと昔テレビでやっていた「逃走何とか」という番組、タイトルが
思い出せないな。

ハンターから逃げるやつを思い出した。

「なんで、みんな騒いでるの？」

走りながらデュノア君の疑問

「そりゃあ、3人だけだからね、IS男が・・・」

自分の体を見てハッとするデュノア君、男としての自覚あるよね？

「あ・・・ああ、そうだね」

嘆くように一夏が

「ここじゃ何処に行ってもウーパールーパー状態だ」

「何それ？」

わかりにくいたとえをするな一夏は・・・デュノア君が分かってないぞ

「昔に流行った珍獣？って所」

3人で全力疾走して逃げ切ることは成功したけどかなり時間をロスしてしまった。

ACT・07に続く

ACT. 06 「3人目の男子」 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしています。

ACT・07「ブロード貴公子は博識」

「移動のたびにあの逃走劇だとやってられねー」

正直俺も一夏と一緒に叫びたかった・・・

逃げ切ってアリーナの更衣室に着いたときには時間ぎりぎりだった。

「ごめんね、いきなり迷惑かけちゃって」

一夏も着替え出す

「気にするなって、男2人しかいなくて辛かったんだ」

「そうなの？」

そうなの？ってデュノア君・・・二人もいれば助け合えるって？未だ2日目でもこれだけめいってるんだよ？死にそうだよ？

「一夏の言うとおりだな。俺は赤城 翔。翔で良いよ」

「俺は織斑 一夏、一夏って呼んでくれ、よろしく」

「うん、よろしく。翔と一夏だね。僕のことシャルルで良いよ」

3人で握手したんだけどさ

「時間ヤバイから早く着替えた方が良いな」

俺は基本的に朝出かける前にISスーツを着ているから良いけど一夏は着てない。

いやISスーツは実習日に1日中着ても大丈夫だって山田先生が昨日言ってたし。

「うわ！」

何事かと思って振り向くとシャルルが一夏を見て顔を真っ赤にして

いる・・・思春期か・・・。

「着替えないの？」

聞いてみた

「え？う・・・うん。着替えるよ・・・でもその、あっち向いててね」

思春期なんだね、そう思えばいいや正直君は何者かは分かってるから。

「いや、人の着替えはじろじろ見ないけどね、とっとと着替えないと鬼教官が・・・」

まあ着替えるのは一夏もだけどねと思ってたら

「そうそう、織斑先生に怒鳴られないようにしなとな、特に一夏は・・・」

振り向いたとき

「何かな？」

シャルルはもう着てた

「着替えるの超早いな・・・なんかコツとかあんのか？」

「い・・・いや別に？アハハハハ」

笑顔が引きつってますよ？

「これ、着るときにはだかって言うのが着づらいんだよな、引っかって」

まあ一夏のスーツはデータ取り用の試作品みたいなもんだしね

「引っかかって!？」

シャルル・・・やっぱり思春期なのか・・・顔が真っ赤だぞ？ 中学生じゃあるまいし。

「確かに着るときに引っかかるだろうね一夏のは。俺のはオートフイッティングだし、出かける前に着てるから楽だよ」

「翔のスーツって特注品なの？」

シャルルとも一夏とも違う俺のスーツに興味を示したのは

「俺の？ 俺のは篠ノ之ラボのダークブルー・デビル・タイプSってやつらしい」

まあ俺も篠ノ之博士にあったのは2回だけだけど、おっとこの話は追々語るとしよう。

「篠ノ之ラボって、まさかあの束さんの？」

一夏は面識があるのか・・・あー篠ノ之さんのお姉さんだからね

「俺は篠ノ之ラボのテストパイロットだから」

言ってなかったっけ？

啞然とする二人をよそに僕は更衣室から出て行った

「ちょっと待ってくれよ!？」

2分後第2グラウンド

「今日は実機による実習とフォーマットとフィッティング機能の学

習を行う」

実機は打鋼とかリヴアイヴとかがあるけど基本的にフォーマットやフィッティングはオフでやるだろ？じゃあどうやって学習するわけ？
「赤城、お前が専用機を使用してフォーマットとフィッティングを実戦しろ」

俺が実戦ね・・・っておい！？

「ミラーージュですか！？」

「返事は「はい」だ」

怖いよ？

「俺のミラーージュは通常のフィッティングとは少々異なりますよ？」

一応言っておく、同じではない

「かまわん、やれ。それから実戦でそのままフォーマットとフィッティングを行うようにするためにデュノア、お前が赤城の相手をする」

「はい」

そうですか、素人でも専用機持ちは専用機持ち扱いなんですね

「納得いきませんわ！」

さっきまで空気だったなオルコットさん

「ふむ、だがお前では赤城の相手にはならん」

あーいいいますか貴方・・・

「ならば今すぐにでも赤城さんと模擬戦をさせてください」

俺を見る織斑先生

「俺は先生の判断にお任せしますけど？」

見られても困るという表情で帰しておこう

「決定事項は決定事項だ、赤城とオルコットの試合は次の月曜日だ」
つまり6日後ということである

「では赤城、デュノア模擬戦を始めろ」

「はい」

俺はミラーージュを起動させた

「WAKE UP NOW・・・・・・ Wait・・・日本
語にローカライズを完了しています・・・システムの起動を
完了しました・・・パーソナルコードを登録しています・・・」

ここまで表示されてミラーージュが展開された

「現在、初期化を完了しています・・・パーソナルネーム・・・ミ
ラーージュランサーF1、使用者・・・Akagi Porosche・
Kakeru、システムバージョン・・・Ver1.1β、フィッティ
ング作業を開始しています。フィッティング作業中ですが行動が可
能になりました」

「いけます」

時間かかるよな

「行動開始までがネックだな、では模擬戦を始めろ」

俺は上空で待っているシャルルの方へ飛んでいった

「手加減はしないよ？」

「もちろんだ」

イプシロン Mk. 7（フルオートもしくは単射のレールマシンピストル）を装備、一気に上空に駆け上がる。

「早い！？」

ミラージュは軽量な機体に高出力ブースターを持ち1秒以下で音速を突破する機体だ。

イグニッションブーストを使用すると最高速まで3秒とかからない。

「これくらいで驚いてたらやってけないぜ」

太陽を背にしているのでシャルルからは見えにくいはずだ

そこから、ブースターを切って・・・自由落下！

「現在の加重・・・3.5G、速度・・・マッハ0.2、イプシロン Mk. 7..RDY GUN」

「FIRE！」

フルオートでイプシロンを発射。若干シールドにダメージを与えたがそれだけか。

「僕だってだてに代表候補生なんじゃないよ！」
アサルトカノンを構えて応戦するシャルル

「早いけど、避けられない訳じゃない！」
左右に若干スライドさせてシャルルの砲撃をよける

姿勢を水平に戻した後バレルロールを組み合わせて後ろに付いていたシャルルの背後に付ける。

※バレルロール…ロールと機種上げ（ピッチアップ）を同時に行う空戦機動の一つ。

が、シャルルは思いっきり急制動をかけて俺の射程から逃げる仕方なく俺はインメルターンを使用して縦方向にUターンを行う。
※インメルターン…180度ループ・180度ロールを順次、もしくは連続的に行うことで縦方向にUターンする空戦機動である。

「逃がさないよ！」

「警告、敵ISよりロックオンされています」

シャルルのISの重機関銃が火を噴く

「RCSバースト！」
バーン！バーン！という音共に俺は180度ターンをした。

「な！？」

イグニッションブーストを使用して一気に音速に達して

空にソニックブームを残して一気にシャルルとの距離を詰める

「俺だって終わらない！」

がアサルトカノンの弾が俺に命中、大きく煙が上がるが・・・。

「フィッティングなびにシステムの最適化が終了しました。全武装が使用可能です、この表示を消すには確認ボタンを押してください」

「チェック（確認）」

ファーストシフト
第一形態完了！

「さて、本気で行こうか！」

接近戦武器のVランス（槍）を展開、イプシロンと組み合わせる中距離から一気に近距離戦に持ち込む。

「見える武器がすべてじゃないぜ！」

一度Vランスで攻撃の後Vランスをわざとはじかれるその後可変出力レーザーで死角を狙うが避けられた

「中々やるね」

プライベートチャンネルでシャルルが話しかけてきた。

「コイツは一応ルーキーだけどそれなりには動く！」

問題は・・・ダミーアウトシステムを作動させてるってことかな・

※ダミーアウトシステム…機体ダメージ量が任意に設定した値に達したとき擬似的に戦闘不能判定を出して機体の過度な損傷を押さえ

るシステム。

ダミーアウトシステムは基本的6分の1程度までシールドエネルギーが減らないと作動しないが、今はシールドエネルギーが10%喪失しただけで作動停止するようにしてある。

今のシールドエネルギーから見てあと1回でも攻撃を受ければ終了だ

いったん距離を取りレーザーで牽制しつつ距離を詰めていく

「それじゃあいつまでたっても決着付かないよ！」

そう、シャルルも巧みに攻撃をかわしながら反撃するのである。

その攻防が経過して5分

「いいかげん終わりにしたいぜ」

いったん垂直上昇後自由落下しながらチャフを放出

※チャフ…電波を反射する物体を空中に散布することでレーダーによる探知を妨害する防衛兵器

このチャフは基本的に電波妨害用に放出したのではない。

このアルミ片チャフに向けてレーザーを照射すると・・・反射を利用して屈折、そしてこのチャフを制御することでその威力を何倍にも跳ね上げる・・・成功すればね

いや、撃ったよ・・・ただグラウンドを切り裂いただけだったけどね

でもチャフのおかげでシャルルが混乱している間に懷に飛び込めた
が決定的な一撃の前に逃げられた。

そして反撃を食らって・・・

「あ．．．．」

「戦闘終了」

「愚かなご子息は3億ドルの戦闘機と共に東シナ海に沈みました」

「戦死通知!？」

ミラージュの要らない機能．．．戦死通知

「何それ．．．」

啞然としてると

「早く降りてこんか馬鹿者共!」

織斑先生に怒られました。

いや、なんか最後の戦死通知でどっと疲れた。

何とか2日目を乗り越えて寮に戻ってきた。

「おじやまします．．．」

シャルル?

「遠慮しなくても良いよ、今日から君の部屋でもあるんだ」

鞆を置いて僕はPCの電源を入れる

「シャワーを使うなら先に使って良いよ、俺はちょっと強のデータをまとめないといけないから」

そう言って僕は今日の戦闘データをまとめるために光磁気ディスクをパソコンに入れた。

「じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな」

そう言ってシャルルはシャワールームに入った。

ACT.
08に続く

ACT. 07「ブロード貴公子は博識」(後書き)

ご意見・ご感想をお待ちしております。

ACT. 08 「孤独の交差点」 (前編) (前書き)

昨日は更新できずスイマセン
長くなったので前編・後編に分けました。

ACT・08「孤独の交差点」(前編)

俺はすぐにデータをラボに転送。

「ボックス、ダミーデータを展開して警戒モードで待機だ」
「了解です、では警戒モードに切り替えます」

ボックスに指示を出して俺は制服からジャージに着替えた。
ピピピ・ピピピ

俺の携帯だ

「はい、赤城です」

電話の相手はとってもハイだった

「やつほーポル君！東お姉さんだよー！」
いつになくハイな篠ノ之東さんだった

「博士・・・いつになくハイですね・・・」

正直そのテンションについて行けないよ？

「そーかな？ところで今日はミラージュの初陣だったんだね、黒ちゃんはずっと出番無しだけ」

そう言うけど、あんまり使えないんだよ・・・ISの使用規定がどうのこうのとめんどうだから。

「ええ、とりあえず織斑先生からミラージュのフォーマットとフィッティングを行えとのことでしたので」

「とりあえずそのデータは受け取ったからこっちで分析するね。後はもうちょつと黒ちゃんのデータがほしいけどな、とりあえず今日出てきてくれる？」

もちろんこれは無視できないので出るしかないよな。

「了解です、とりあえず0時過ぎで良いですね？場所は・・・」

「とりあえずル・マンまで来てね」

※ル・マン…フランスにある中小都市。ル・マン24時間耐久レースで有名。

「フランスですか・・・とりあえず了解です。あと例の図面です。なんですけどその採点もお願いしますね」
とりあえずボックスで出るしかないか

ガチャ

シャルルがシャワー室から出てきたらしい

「分かったよう。それじゃあよろしくねー」

その音を察してか束さんは電話を切った

「あー、はい、了解です」

俺が携帯をしまおうというところでシャルルが出てきた

「電話でもしてた？」

「うん、ラボの人とね、実戦データを見たけど機体とのマッチングは良いけどもう少し機動に慣れろって言われたよ、もっとも打鉄よりはデータ敵に戦果はあるらしいけど」

俺は手早く着替えをまとめると

「じゃあシャワー浴びてくるからそのうちに見られたくない本とかは隠しとけば？」

ほら思春期の男子にはいろいろあるだろという

「本？」

あれ滑った？一夏は鉄板ネタとか言ってたけど・・・

「うん、一夏が言ってたぞ・・・俺はよく分からないが多分エロ本じゃないか？」

なんか字が違う気がするけど気のせいだろう

「そっそそそそんなほんある分けないじゃないか！」

ないだろうなこの反応を見ると・・・それ以前にシャルルは男じゃないし・・・

「とりあえず入ってくるよ」

もちろんボックスは腕時計でも防水なので気にせずシャワーをするボックスの予測だと問題は付けっぱなしのPCだ。もしかしたらあの中に入っているデータに手を出すかもしれないという。

「どう思う？」

「彼女がデュノア社からのスパイでは無いと言い切れますか？」

「それはそうだが、もし違ったらどうする？デュノアはただの広告塔として娘を利用してるだけかもしれない」

俺の否定も残酷だが、最悪の事態はもっと残酷かもしれない。

「それでは「私たちデュノア社のテストパイロットは男です」と世界に発表するべきではありませんか？」

だからといって実の娘を・・・広告塔として晒すようなことをするだろうか？

「確かにデュノア社は第2世代ISに関しては世界トップクラスだ、しかし第3世代となると話は別だ・・・しかし、そこまでして企業競争に勝ち残ろうとする親は・・・討つ・・・」

「翔、あまり過激なことをするのはオススメできません」

「分かってる」

シャワーは流しっぱなしでとりあえず服を着たそのときだった。

ピー！という強烈なビープ音・・・PCのダミーデータを弄ると出るエラーメッセージだ。

ガチャ・・・

「何やってるんだ？」

シャルルが俺のPCの前で硬直していた

「いや・・・その・・・」

PC画面は真っ暗な画面に赤く浮かび上がる文字で「Donner
une punition pour les p?cheur
s (罪人に対して罰を与える)」

「各国語バージョンなんて作るんじゃないかな・・・」

フランス語の警告にビックリしているご様子・・・

「そう言えばこれ連続フラッシュパターンの後でるんだった」

1秒間に100コマで紅と黒を交互に写るといふ何とも残念な仕様。

「いや、そのどんなパソコンなのかな？って思ってちょっとさわったら・・・」

「これはちよつと言うよりPCのメインプログラムに入らないと
鳴らないアラームなんだけどね」

もちろんダメーデータのだけど

「あ・・・」

すっかり黙り込んでしまうシャルル

「デュノア社の意向は俺の眼中じゃないし、まあ何をしようとして
いたかは聞かない。ルームメイトのパソコン出しちよつとは見たく
なる気持ちは分からなくもないから」

だいたいは察しが付いている。

「何処まで知ってるの？」

仕方ない、俺の願いとはちょっと外れてしまったのだから

「全然知らないよ、デュノア社長には男子の子供はいない事しか知らない」

そこから導き出される答えは簡単だ。

「そうなんだ・・・そこまで分かってて・・・」

「俺だって信じたくなかった・・・」

「翔、私が話してもよろしいですか？」

ボックスが助け船を出してしまった

「誰!？」

そりゃあ予想外の声がすれば驚くわな

「驚かせて申し訳ない、ボックスちゃんとした姿の方が良いと思うが・・・」

「分かりました、では・・・」

俺の腕時計が光る

ここで知っていておいてほしいのはボックスは普通のISでないとだ。

管理人格という人格を持っている・・・人工知能AIに似たものだとか・・・そのため人間と直接的対話を図るための手段として人間と同じような姿になるのである。

「初めまして、私は翔のISであるブラックバード（FX／SR－71／BT）の管理人格でBlackbird Auto Con

t r o l S y s t e m、頭文字を取ってB，A，C，Sと申しま
す。訳あってこのような姿になることができますが、普通のISと
あまり変わりありませんので気軽に話してくださいね」
ニコニコとよく喋るボックス、ちなみに今は省エネモードらしく身
長が140センチくらいで和服姿である・・・何故和服が黒で赤い
ラインが入っているかは聞かないでくれ・・・。

「おしゃべりなのは俺があまり喋らなかったからだ・・・」
ポカーンとしてる

「えーっと・・・」

やっぱり着いてこれないわけだ

「シャルルとの模擬戦に使ったのはもちろんこの子じゃない、バッ
クスはちよつと特殊だから篠ノ之博士がそのサポート用に作ってく
れたんだ」

「へー、翔っていったい何者なの？」

驚くのは分かるけど半分呆れられてるよな

「えーっと・・・篠ノ之ラボ専属テストパイロット兼デモンストレ
ーター兼学生かな」

考えつくだけの肩書きを並べてみた

「シャルル・デュノア、残念ながら翔は記憶を失っています。さら
に私はラボからこの学園でテストを目的に翔に託されたのでそれ以
前の翔については何も知らないのです」
ボックスがフォローしてくれた

「記憶がない？」

「まあ、その無いな。なんというか気がついたら名前すら覚えてな
かったよ。身分証があったから自分の名前として認識できてるだけ

だし」

そう言って俺は免許証を出す

「じゃあ家族とかは？」

家族か・・・こっちには居ないな

「調べてもらったけど居ないって言われた。まあいても覚えてないし・・・」

「こちらが何者かは明かしました。今度は貴方が喋る番ですよ、シヤルル・デュノア」
えーっとバックス？

「僕は・・・」

バックスは言わせたいみたいだけど・・・

「シヤルロット・デュノア、デュノア社のテストパイロット。デュノア社社長の娘だが正妻の娘ではない・・・これだけ分かれば十分だ」

俺はシヤルルの言葉を遮った

「翔！どうして言ってしまうのですか？」

バックスが抗議の声を上げる

「お前は情報を聞き出したいのか？それともただのサディストか？どっちか分らん」

たしかに情報は欲しい、回りくどく聞くのはもう良い知っている情報はずべて出す。

「翔、ごめん。騙すようなことをして」
シヤルルが謝る

「だから謝るな、俺に謝るな。むしろ俺が謝らないといけない事をした」

戦略を間違えたよ・・・

「うん・・・」

「さてと・・・ちょっと出かけてくるよ、朝までには戻るから心配しなくていい」

そう言って俺はボックスを待機モードに戻す

「え？出かけるってどこに？」

そりゃあ驚くか

「野暮用でちよつと遠くまで・・・」

そう言って窓から屋根に上る

ACT. 09に続く

ACT. 08 「孤独の交差点」 (前編) (後書き)

ご意見・ご感想をお待ちしています

ACT. 09 「孤独の交差点」 (中編) (前書き)

長くなりすぎました。
結局3部に分けます。

ACT・09「孤独の交差点」(中編)

屋根に上ると織斑先生が居た

「こんな時間に何処へ行く気だ？赤城」

嫌な人に見つかったな

「ちょっと散歩に行ってきます」

もちろんISでね

「許可した覚えはないが」

そう言えば許可居るんだっけ？

「散歩ついでに篠ノ之博士と雑談してきます」

篠ノ之の名前が出たとたん織斑先生の態度が変わる

「また呼び出しか・・・全くあいつは」

入学式までの1ヶ月間に2回ほど俺は篠ノ之博士に呼び出され無断外出して大騒ぎになったのである。

「伝言があれば伝えておきますが・・・今日は他の用事もあるんで手短になる用件をお願いしますね」

そう言って行こうとすると手を捕まれて引き留められた

「まったく、明日の授業に支障を出すような事にならないようにしろ、いいな？」

織斑先生はそういうと寮に戻っていった。

「さてと、行きますかね」

「翔、昨日追加された機能で現地での移動手段を利用できます。駐車場に向かってください」

新機能、バイクを使用できる？。

「バイクを持つてくのか？重労働だぜ？」

持つのは大変だが、ボックスは特に問題としないようだ

「そうではなく、バイクをISの装備として登録します」

また凄いことだな

「つまり、ISのバスのロットにこいつを入れるって事か？」

俺は無理だと信じたい・・・だってバスのロットには容量制限がある。

一定以上は入らないのだ

「私は通常のISよりもバスのロットを多く持っていますので容量的には問題ありません」

凄いことではあるわな

「とりあえず入れとくか・・・」

バスのロットにバイクを入れると僕はツインドライブの起動手順をスタートした。

「ツインドライブ起動チェック」

「シンクロシステム正常起動しました。ミラージュ ランサーF1 (FX/G2/CR-200)との同期を開始しています・・・同期完了しました、同期率は100.5パーセントです」

俺を光が包み俺は人型モードのボックスと同じ姿になる。

そうボックスは人型では女性なのである・・・つまり何故か俺は今、体は女性なのである。

「チェックリストクリア、起動！」

そして俺をISが包んで起動完了である

「ツインドライブモードで起動しました、私としてはツインドライブで飛行しなくても間に合う速度だと思うのですが・・・」

「さあ、俺も分からないよ、博士がご氏名だし、仕方ないんじゃないか？」

「最初は嫌がっていませんでした？」

確かに最初にツインドライブで起動したときはショックだった。手は震える、足はガクガクととても男とは思えない容姿に愕然ともしたけど、セカンドシフト後の機動性が格段に違っていたりするという利点の方が多かった。

「さてと、新記録を作りますかね・・・」

数分後ユーラシア大陸のはるか上空、成層圏を超音速で飛行する未確認飛行物体が観測されたとかされないとか。

ル・マン郊外

「お久しぶりです、博士」

俺は篠ノ之博士に指示された場所で彼女と会っていた。

「久しぶりだね！いつ以来かなあ？」

いつも通り？の熱烈な歓迎を受けながらとりあえずデータを渡す。

「これが第4世代の設計図で名前がビックバイパーとエクスピードです」

この2つは俺が趣味で勝手に設計した第4世代ISである。

「ほうほう、前回の第3世代の時より完成度高いねえ」

東さんはデータをすぐに展開しチェックを始めると同時に追加装備をブラックバードにインストールしていく。

ここで悪魔がでてきた・・・

「しょちょー来たんですかあー？」

中学生くらいの女の子がでてきたがこの子が悪魔なのである。

実は過去2回ともこの子にいられているのである。

この子は新乃 圭ちゃん、いわゆる「女の子が好き」と言うタイプの人だ。

「圭ちゃん！？いやー・・・ひゃん・・・あ、ちょと！？ほんとにやめてください！！」

ここで知っておいて貰いたいのが今俺は女性であると言うことであ

る。

「ちよつと!?!どこさわってるわけ!? 離せ! この HENTAI!
!」

速攻で後ろに回られて胸を以下略……

対処方法? 簡単です一本背負いで投げる!

「離れろ……この変態があ!」

そして蹴る! ひたすら蹴るのである……え? 死なないか? 大丈夫
だと思ふよ

「あゝ良い……この蹴られる感覚う……」

いっそのこと殺してやりたい……イカンイカン、俺の暗黒面が顔
を出すところだった。

とりあえず適当に気絶させるか……

「さてと、ポル君の部屋にいる子なんだけど、知ってるよね?」

とりあえず圭ちゃんをしばき倒したところで束ねさんに言われた

「はい、とりあえずは嫌われる算段を付けてます。最悪は逃げます」
そういうと束さんは爆笑した

「あーはははは、きびしーねえ。いやーやっぱりポル君を学園に送
って正解だったね」

俺は覚えてないというか知らんけどな

「とりあえず、この後は罪人達の贖罪を……ちよつとね」

意味深に笑うと束さんは

「でもね、あの子の気持ちも分かってあげた方が良いと思うけどね
♪」

それは i f の話だ。もしも彼女が……

「そうですね、心得ておきます」

「そうそう、今回は新しい装備も追加したから」
そういうと束さんは気絶している圭ちゃんを引きずってラボに行ってしまった。

「さてと、じゃあ行きますかね」

「本当に行くのですか？翔」

彼女を送り込んだ真意を確かめにデュノア社社長宅に行く

「行かないといけない気がするから・・・かな」

思ったより近かった件について・・・

「ここか情報収集を兼ねるから単一仕様能力じゃなくてストラトスプロトタイプポを使用する」

「了解、第2形態移行、ストラトス プロトタイプポ展開します」
※ストラトス プロトタイプポ・第二形態から使用可能になる偵察特化型装備。マイクロカメラの映像を機体に投影することによってあたかもそこに何もないように消えたり、センサー波吸収塗装による完全なステルス形態で無人機のセンサーには一切反応しない。ただし機体のエネルギーと電磁パルスの関係で膨大なエネルギーを使用する攻撃装備は使用できない。単一仕様能力（漆黒ノ霧）との併用はできない。

監視カメラ、赤外線アクティブセンサーに空間波動センサーと・・・
ここは機密の軍事研究所か？

「面倒だ、一気に突っ切る」

「あまり得策とはいえませんが・・・この場合ストラトス プロトタイプポの性能テストにもなりますね」

イグニッションブースト

瞬時加速で一気に加速、目的の部屋まで2秒とかからない、むろんセンサーには反応はなかった。

A C T・10に続く

ACT. 09 「孤独の交差点」 (中編) (後書き)

ご意見・ご感想をお待ちしています。

ACT. 10「孤独の交差点」(後編)

「お悩みのようですね、デュノア社長」

その男、シャルルの父は昼間だというのに自室のソファで頭を抱えていた

「誰だ!？」

来客の予定はなかったようだな

「息子さんの学友ですよ、ちょっと彼のことでお話があつて参りました」

太陽の光で逆光だったので2・3歩前に入る

「日本から来たというのか?まさか・・・超音速機を使用しても無理だ」

驚愕するシャルル父の前に俺は

「私は少々常識という概念がありませんので」
そういつてメモリーカードを投げて渡した

「つまらんことで娘を大変な目に遭わせる事はないと思うのでせめてもの慈悲です。第3世代ISの非武装仕様です」

もちろんただでくれてやる訳じゃない、ちゃんと俺だって言わなきゃいけないことがあるからな

「何故私たちにここまで・・・」

俺はブラックバードを解除、残念ながらツインドライブ機の待機状態ではまだ女性なのである・・・悲しい

「もちろんくれてやる訳じゃない、あんた・・・自分の娘を道具に

してでも会社を守りたいのか？」

そう聞くとシャルル父は沈み込んだ表情になった

「私は、役員会の決定を覆せなかったのだ・・・」

そうしてシャルル父はポツポツとその経緯をしゃべり始めた。

自分の妻は子供を産めない体質であったこと、シャルルは不倫相手の子ではあるが正妻は彼女を引き取りたいと言っていたこと、しかしデュノア社の役員会で日本における特異ケースとの接触にちょうど良いと言うことで彼女を利用しなければいけなくなったこと、その罪の意識から彼女に冷たい態度をとっていたことなど。

「なるほどね、利益優先のくだらない理由ではあるけど、一応父親としての自覚はあるわけだ・・・」

まあ合格点かな。

「シャルロットは・・・どんな様子なんだい？」

まあ父親として当然か

「あんたにそれを心配する権利はないと言いたところではあるが・・・まあ良いだろう、俺に女子であると早速ばれたな、まあ俺はちよつと事情が事情だから仕方ないと思うが」

なんだか・・・ただの男前女子的な風に見られてる？

「そうか・・・君なら仕方ないとな・・・」

残念そうではあるがある程度あきらめが見えた。

「俺は帰るけど、やっぱりそのメモリーカード返してくれ。第3世代と第4世代のデータが入った豪華版に交換だ」

とりあえず父親としての自覚があるだけマシかな

ISを展開、寮に帰宅しないと面倒な時間だ・・・。

俺は空を飛んでいる感覚が好きだ、大気を切り裂いて超音速の壁を破るイメージが好きだ。

残念なことはブラックバードの高速モードはマッハ7.1（時速8697.5?/h）で飛行し東京一パリ間なら1時間ちよつと言うことである。

日本・IS学園 学園寮にて

寮に戻るとシャルルは寝ていた。そりゃあそうだ、午前4時を回ってるんだから。

俺は適当に着替えるとベッドに横になった。

「ドツと疲れるのは残念なんだけど、訓練後みたいで心地良いな・・」

「私には理解しかねます」

そして俺は若干仮眠をとったと言う睡眠時間で翌朝を迎えたのだった。

午前6時

「こう・・・ちゃ？」

俺が紅茶を入れているとシャルルが目を覚ました

「おはよう、シャルル。目覚めの紅茶でも飲むかい？」

神様が送ってくれた荷物の中に何故かティーポットと茶葉が入っていたことはびっくりだ。

というかあの段ボールは無駄に容量がある。某狸じゃなくて某猫の4次元何とかと一緒にとか？

「それじゃあもらおうかな」

昨日の夜あんな事があったとは思えない顔だな

「はい、かしこまりました。なにかご要望は？」

俺も寝ぼけていた気がする・・・

「じゃあミルクティーをお願いします」

まあ黄金比とかはもう一つの小説の主人公にお願いするとしてまあ「紅茶の入れ方」なる本が段ボールから出てきたのも驚きだよな。

「さて、昨日の件でシャルルのお父さんと会ってきたよ、それで・・・」

やっぱり話しておくべきだと思い話そうとしたんだけど言葉が出ない

「昨日、父から電話があったよ。今までのこととその・・・これからどうするかで」

シャルル父も行動派なんだなと思ったが・・・もっと早くに動くべきだと思う

「これから、どうするんだ？もしかして本国に・・・」
シャルルはうつむきながら

「呼び戻されるだろうね、そしたら最悪は牢屋行きかな」
困ったように笑うシャルル

「問題ない。シャルル、君はここに残れるよ」

俺は平然と言った。

「え!？」

俺は生徒手帳の特記事項の欄を開く

「お父さんに呼び戻そうと言う動きもあるって言われたんじゃない?でも、IS学園校則特記事項「本学園に在学中の生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない」っていうのがある。つまり戻そうとしても学園の校則で禁止されていてこれを破ることはアラスカ条約に違反することになるんだ。3年間は

安心だし第3世代ならもうとっくに試作段階に入っても良いくらいのデータは与えてきたから平気だよ」

嫌われることを目的にしたけど結局はこうやって協力してしまう俺って結構情けないやつ

「翔って、嫌われようとしたり、でも僕のために動いてくれたりして一体どっちなの？」

ここで本心話すべき何だろうか・・・

「俺は、誰にも好かれる資格はないからね・・・ちょっとナーバスだったただけだ」

言ってて恥ずかしくなった

「うーん、もう無理かな？」

なんか幻聴が聞こえた？

「シャルル？何だって！？」

うろたえる俺にシャルルは

「秘密だよ♪」

そういつて微笑んだ

結局好意を持たれたのか否か・・・もしかして俺は自分の恋愛には鈍感なのか！？

A C T・11に続く

ACT. 10 「孤独の交差点」 (後編) (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしています。

ACT. 11「クラス代表決定戦―Fire Ball―」

それから1週間後、ついにクラス代表決定戦が始まる

アリーナピットにて

「ホントにでなくて良かったのか？シャルル」

シャルルはクラスメイト数人から今からでも遅くないし立候補すれば？というすすめを断り一夏や俺の練習に付き合ってくれた。

もつとも本人の意向を尊重したいと推薦がでなかったことが奇跡といえるだろうけどな

「僕は翔が代表の方が良いと思うからね」

頼むから俺の負担を増やさないでくれ……

さて、もうすぐ一夏のISが到着するのを待っているんだけど……こない

試合順は

オルコット VS 一夏

オルコット VS 俺

一夏 VS 俺

の順番なんだけど一夏のISが到着しない……

「織斑先生、まだこないのですか？」

俺は仕方なく内線で確認をとるが

「まもなく到着する、もう少しまで」

と言われてから30分経過……

「もう試合順変えた方が良くないじゃないか？」

一夏が若干不安そうに言った

「それは同意できるけど、あの人が納得するかな？」

オルコットさんは残念ながら納得してくれないだろうな・・・こないという理由なら

この1週間は篠ノ之さんから剣道を、俺とシャルルからはISの基礎と操縦について訓練を受けた一夏はまあ平均くらいにはなったかな？

「織斑君！きましたよ織斑君の専用IS！」

山田先生のアナウンスと同時に搬入扉が2つに分かれて開いていく出てきたのは白いIS。

「織斑君専用のIS白式です！」

山田先生の声は若干うわずっていて聞き取りにくかったがしっかりと名前が聞き取れた。

「しかたない、一夏のフォーマットとフィッティングの時間くらいは稼いでくるよ。良いですよね？織斑先生」

その時間を稼げれば一夏も御の字だろう

「わかった、では試合順を変更してオルコットと赤城の試合を行う」

俺はミラーージュ ランサーF1を展開しカタパルトの上に乗る

「翔！」

シャルルに声をかけられた

「ん？」

「勝ってね！」

いやですっていったら後は怖そうだしな

「全力は尽くすさ」

さて大空に行きますか！

カタパルトとブースターの推進力で一気に加速

まあすぐ止まらないといけないけどね

※バックスは基本的にミラージュの補助として音声でのアナウンスを行います。

「ずいぶんと用意に時間をかけていましたのね。てっきり逃げてしまったのかと思いましたわ」

ずいぶんと好戦的な人だな

「遅れたことは謝罪しますが、後の文句は一夏に言ってください。彼のISがこなかった故に僕が先陣を切らなければいけなかったのですからね」

ここは冷静に相手の出方をうかがうか・・・いや初段であのレーザーライフルを撃ってくるだろうしここは自動回避ONで後部警戒は半自動制御、そっちがレーザーならこっちもレーザーで行くか・・・。

「では、墜落^{おち}なさい！」

その言葉と同時にレーザーライフルを撃ってきた。

「Engage」

自動で緊急回避旋回バンクを多めに取り相手の死角に入る。

「どっちにしろ君の遠距離射撃型じゃ・・・俺は倒せないけどね！」

まずは相手の照準能力を見て決める！

ブチッ・・・

なんか聞こえたけどオルコットさんが黒いオーラが・・・オルコットの暗黒面が顔を出した！？

「潰して差し上げますわ！！」

相手のレーザーライフル、スターライトmk-2の攻撃を左右に
けてかわしつつ2門ある可変出力レーザーを右は最小の22%で照
準機、左は58%でメイン武装
それぞれの役割を持たせて反撃

「踊りなさい、わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティ
ーズの奏でるワルツで！」

「ワルツね・・・俺は円舞曲^{ワルツ}よりヴァイオリンソナタに見えるけ
どな！」

※通常ヴァイオリンとピアノの二重奏の演奏形態によるソナタを指
す。ピアノ伴奏のないものは無伴奏ヴァイオリンソナタという。

イプシロンMk-7を長距離射撃モードで展開、フルオート射撃で
反撃だ！

「撃墜される前に降参した方が良いと思うけど」
プライベートチャネルで話しかけると

「冗談じゃありませんわ、降参するのはわたくしではなくあなた
方でしてよ！」

相当イライラしてるな・・・無理もないか現状で1発も当たってな
い上に俺の反撃でシールドエネルギーは相当削られてるからな

彼女の攻撃で最大の強みはアンロックユニット、ブルー・ティアー
ズ（以後ビット）と言うらしいがそのビットが縦横無尽に俺に向か
ってレーザーを撃ってくるのだがまあパターンにはめて攻略可能だ！

「近づいたらすかさずVランスで破壊！」

ビットは操縦者が指示を出さないと動けない、つまりこれはそこに
スキができてやすくなるわけだ

ビットはすべて破壊した、これでもうと思ったら

「4機だけではありませんのよ!」

今度のビットはミサイルだった

「自動回避します」

「めんどくせー武器だなオイ」

フレアを放出、効果無しか・・・レーダー式?じゃあチャフだが・・・いやあいつが指示を出してるのなら手はある!

大きくインメルターンを行いオルコットの頭上に来るように1発を引きつけて・・・Vランスで破壊、あたかも直撃したかのように黒煙が上がる。

「これで彼も・・・え!？」

「ダメージ無し、戦闘続行可能です」

黒煙を切り裂いてオルコットとの間合いを詰める。彼女は驚いて最後の1発を自爆させてしまった。だがここは時間稼ぎだからここでは攻撃しない、一気に加速してソニックブーム(衝撃波)を浴びせるだけだ。

※超音速飛行中に発生する轟く様な大音響のこと。衝撃波以外の原因で生じる単発的な大音響を含める場合もある。

「翔、もうすぐ戦闘開始から30分になります。ここまですれば彼もフィッティング完了でしょう」

よし、ここでケリを付けるか

「装甲を全展開、第2形態へ移行」

彼女の問題は火力とビットの優秀さに頼りすぎて・・・接近戦のバリエーションが少ないことだろうな・・・。

「第2形態に移行します」

ミラージュ・ランサーF1が形を変え始める。
セカンドシフトである。

「まさか、セカンドシフト!？」

細長かった翼がデルタ形状になりさらに機体カラーが変化していく。
つや消しブラックとシルバーからホワイトを基調にブルーのライン
が入る。

「これがミラージュ・ランサーF1の第2形態「ミラージュ・タイ
フーン・トランシェ3 (FX/EF-2000/X-31)」だ」

第2形態から使用可能になる長距離狙撃レーザーライフル、ペガサ
ス Mk・107を展開。

オルコットまでの距離は約400メートル、まあ中距離射撃型なら
有効射程範囲内だ。

「近すぎる。いったん引くしかないな」

攻撃をかわしつつ後退し相手の有効射程範囲外に逃げる。

そこからペガサスを使用して仕留める。

「距離1800メートル、大気状態正常、ペガサスMk・107..
RDY GUN」

「出力30%で固定、敵IS追従ロックOK、FIRE!」

思ったより大きな爆発音だったね・・・いや一瞬空中に巨大な火の
玉が形成されてさ・・・やっぱり25%にしておくんだった・・・

狙撃から接近戦用までこなすこのペガサスMk・107は標的の動
きを予測して補助するというシステムがありそれを最大限に発揮し
て今回は仕留めてくれた。

「試合終了、勝者赤城Ⅱポルシェ 翔」

俺の勝ちを告げるアナウンスが流れた。

「悪いけど、今のは偶然勝てただけだからね。俺がいつでも強いと思わない方がよいよ」

オープンチャネルでそれだけ言う俺はピットに戻った。

戻ったら一夏に

「お前、それは負けたやつが言う台詞みたいだったぜ」と言われた

まあ俺と彼女じゃあクラス代表だと俺は彼女が良いと思うけどな

「俺の負けなんじゃないかな？とりあえず俺は一夏のフィッティングの時間を稼いであっただけだし、チャンスを4回くらい無駄にしたから後で織斑先生に怒られるかもしれないよ」

彼女が第2形態に移行していれば別だがこの場合フェアじゃないからな。

「よく分からないけどサンキューな」

そういつて一夏はオルコットさんとの戦いのために出て行った。

ここでISを解除したら一気に疲れるんだろうな

シャルルの方を向いて・・・

「ちよつと・・・落ちるわ・・・」

やっぱり意識が遠くなった。

「ちよつとどうしたの！？翔！？」

疲れていたのだろう、30分ほど俺は気絶していた。

A C T・12に続く

ACT. 11 「クラス代表決定戦ーFire Ballー」 (後書き)

ご意見・ご感想をお待ちしています

ACT. 12「クラス代表決定」

結局俺は一夏とオルコットさんの試合がどうこう言う前に医務室に寝かせられていた。

気絶から回復した俺は織斑先生に呼び出された。

「セカンド・シフト第二形態移行できることを何故黙っていた」
しかも部屋には俺と織斑先生二人だけである。

「先日篠ノ之博士に口止めされていました。しかし公での形態移行はあの場合が初めてです」

篠ノ之博士という名前が出たとたん織斑先生が頭を抱え始める。
いや偏頭痛持ちだとは聞いたことはなかったけどね。

「そうか・・・最初から参加させるべきではなかったかもしれんな・・・そのほかに何か特筆すべき事はないか？」

あ、あきらめて話題を変えた

「では、簡単にミラーージュ ランサー F1 (FX/G2/CR-200) の第2形態ミラーージュ・タイフーン・トランシェ3 (FX/EF-2000/X-31) の機能説明をさせていただきます」

第1形態からの相違点は以下の通りである

・この形態では可変翼からデルタ翼になり、カラーがホワイトをベースにブルーのストライプが入るようになる。

・単一仕様能力の出現（ただし使用可能なのである実際に使用したわけではない）。

装備の変化

・VR ランサー…V ランスの正常進化形態。展開装甲の採用による攻撃範囲の増大。

・イプシロンMk. 037…第二形態から使用可能になるイプシロンMk. 7の正常進化形。単射もしくは三点バーストモードのみとなる。威力はほぼ同じだが命中精度は200%増し。

・ペガサス Mk. 107…イプシロンMk. 037と同じく第二形態から使用可能になるビームアサルトライフル。機能としては単射・フルオート・三点バースト・スナイパー（狙撃専用モード）の4つとなる。ただし拡散形、中央集中型など数種類のバリエーションがある。

など

「ちなみにハードとソフトを含めて改良点は1700箇所以上に及びソフトウェア面では第2形態のデータを第1形態での運用時に適応し自己進化を・・・」

と言いかけたところで

「赤城・・・」

「はい」

困った顔をする織斑先生

「あと、どのくらいで説明が終わる？」

あとどれくらい？

「あと2時間程度です」

これでも簡易的なのですがと付け加えるとゲンナリという表情になった

「・・・もういい、十分だ」

説明終了。

「とりあえず、改良点の他に問題点も浮上していますので、それを改善しない限りはクラス代表機としての運用は難しそうですね」

例として操縦者へのキックバックのフィードバックである。

ISはキックバックと呼ばれるGや衝撃を吸収するアンチフィード

バック機能というものが存在するが、現在のミラーージュはアンチフ
ィードバックの値が2…1程度、つまりIS事態が受けるダメージ
の半分を操縦者が受けていることになる。

もちろん制限を超えたフィードバックは無効になるのでそれ以下に
押さえられてはいるがやはり細部を微調整しないといけないらしい。
「その件に関しては問題ない。第二形態移行した時点でお前は候補
セカンド・シフト
から外れている」

要するに1年生でセカンド・シフトⅡ1年生の現状機の中で最強と
いう図式ができあがるので学年全体の士気に関わると言うことらし
い。

「了解です。ではオルコットさんがクラス代表になられるのですか
？」

そう聞くと織斑先生は

「それは、本人達に聞くことだ。お前はもう少し休んでから寮に戻
れ」

そう言うのと織斑先生は立ち上がった。

織斑先生が医務室を出るとき入れ替わりにシャルルが入ってきた。
シャルルの情報によると

結局一夏は良いところまでオルコットさんを追い詰めたものの零落
白夜の特性を理解していなかったため負けたそうだ。

「俺は織斑先生の判断でクラス代表候補から外れたみたいだよ」

お手上げという感じで両手を挙げて見せた

「あーやっぱりね・・・織斑先生が管制室で見てられないくらい震
えてたから・・・」

俺生きてて良かったな・・・。

「でもまあ・・・一夏には会っておこう・・・」

シャルルには先に部屋に戻ってもらい俺は掛けられていた制服に着替えて一夏を探しに行った。

・・・今思ったんだが寮にいるのかもな・・・まあいい。

にしてのものと渴いたな・・・おーまだこの甘ったるいコーヒー売ってるんだ、買うしかないなこれは。

アリーナ更衣室・・・いた。

一夏はなんといったものか・・・「燃え尽きたぜ・・・真っ白にな・・・」的な雰囲気なんですけど。

おかしいな、不満が残る終わり方だった気がする。

「一夏、おつかれさん」

そう言ってさっき買った甘いコーヒーを差し出す。

※2つ購入しました

「あ・・・ああ、サンキュー」

疲れた体には砂糖が良いぞ！と誰かが言っていた気がする。

「それ、メチャメチャ甘いからね」

あ、むせた。

「なんだよこれ、ホントにコーヒーか？」

おう！コーヒーだ

「M○Xコーヒーだ、疲労回復には良いぞ」

コーヒーは正直どうでも良い、それよりも

「さてと・・・代表決定戦最後の一試合。・・・やりますかね」

いや、ミラージュの実力だと射程外攻撃で簡単に落とせるけど、近接形と戦ってみたいというのが本音でもある。

「マジでやるのか？」

無言で頷く

A C T・13に続く

ACT. 12 「クラス代表決定」 (後書き)

ご意見・感想お待ちしております

ACT. 13 「クラス代表決定！」（前書き）

ちよつと私用でパソコンの前に座れず更新が遅れて申し訳ありません。

ACT. 13「クラス代表決定！」

数分後、第2アリーナ。

「手加減は・・・しないぞ」

俺は早速Vランスを展開。

一夏が近接形なら、接近戦で戦うのが筋ってもんでしょ！

雪片式型とVランスではリーチのあるVランスの方が有利ではあるが、零落白夜のおかげでかなりの不利である。

つまり、俺は一夏の攻撃を避けながら反撃の機会をうかがうしかない。

まあそこはイプシロンMk. 7との切り替え攻撃で凌げばいいか。ミラージュはP C Iに加えて補助翼による空力制御も行っているのだが通常のI Sより旋回・ロール特性が飛行機に近い。

空中静止時はP C I、飛行時はP C Iに加えて補助翼制御による空力補助。

一度距離をとったところでイグニッション・ブースト瞬時加速

俺は旋回する白式を追うためハイ・ヨー・ヨーを使用して急旋回。

※ハイ・ヨー・ヨー…目標機を追う際に自機の手速度が優速である場合に余った速度を上昇することで高度に変換し一旦速度を落とし、そこから降下することで再び速度を得ながら追隨する。詳しくは検索を推奨。

白式に追いつく前にイプシロン・Mk 7で射撃を行い白式の旋回方向を調整。

もう一度ハイ・ヨー・ヨーを行い白式の真正面に出る。

「そろそろ逃げてないで来たらどうだ？」

Vランスと雪片式型が火花を散らす。

スピードでは俺に分があるがパワーでは若干白式の方が上のようなのだ。まあ第4世代だしね出力が違ふ分けだし。

「クロック・アップ、ステップ1」

「クロック・アップ、ステップ1を実行しました」

※クロック・アップ…ミラージュ・ランサーF1はブラックバードよりも低燃費性能を重視した機体であるために出力的に制限がある。この制限を3ステップで解除する機能である。ただし解除すると燃費が悪化する。

これで白式と同レベル。

一度距離をとり一夏が中段の構えから一気に間合いを詰めてきた。剣道の基本動作だとスタンダードなものだが攻防共にスキができない構えだ。

雪片式型をVランスで受け流しつつイプシロン・Mk7を発射。これで相当なダメージを与えたはずだ。

しかし一夏はひるまずそのまま雪片式型で押してきた、そして「零落白夜」発動。

一戦闘終了ー

「戦死通知…愚かなご子息は3億ドルの戦闘機と共に東シナ海に沈みました」

そしてピットに戻ると・・・関羽がいた・・・いや織斑先生だ。

「お前達、無断でアリーナ使用の上模擬戦まで行うとは良い度胸だな」

「最後の1戦が残っていました」

と答えては見たもののねえ

一夏はそりゃないよって顔だし

「次はないぞ、気をつけろ」

それだけ言うと言ってしまった。

「それだけ？」

拍子抜けした感じ・・・。

一応丸く収まったのか？あの関羽が？まあ良いか今日は疲れた、部屋に戻るか。

ガチャ・・・

「ただいま」

シャワールームから音が聞こえるのでシャルルはシャワーだろう。

上着を脱ぎ自分のデスクの椅子にかける。

アリーナ更衣室でシャワーを浴びたので特にすぐシャワーを浴びた
いって訳じゃなかったしね。

そして今日の実戦データを記録したファイルを暗号化回線で篠ノ之博士に送った。

部屋着に着替えた後ポツリと呟いた。

「今日の夕飯・・・何にしようかな・・・」

ほんの1ヶ月前までは食べられればいいと考えていた人間の言うことじゃないよなんて思いつつ雑誌を開いた。

雑誌を読み始めて多分2〜3分くらいだと思う。

「あ!?!?!」

シャルルの声?

そう思ってその方を向くと……バスタオル1枚のシャルルが……
・おい、服着ないと風邪引くぞ?

気まずい沈黙……

「な……なんか狙った?」

狙うってレベルじゃないが……

「え!?!あ!ちよっと見ないで!?!」

顔を真っ赤にしながらシャルルが叫んだ。

「あ……ごめん」

イベントですか!?!?

こんな恥ずかしいイベント無しだろ……。

A C T . 1 4 に続く

ACT. 13 「クラス代表決定！」 (後書き)

ご意見・ご感想をお待ちしています

ACT. 14 「転校生は専用機持ち」 #1 (前書き)

今回は3回くらいのお話になります

ACT. 14 「転校生は専用機持ち」 #1

俺は何度も夢で見る光景がある。

「スホーイT-50だぜ！本国でも配備が始まったばかりの機体
が何で・・・畜生！撃って来やがった！。こちらワイバーン01攻
撃を受けた、繰り返す攻撃を受けた！、反撃許可を！！」

自分が座っているのは戦闘機の操縦席

「ワイザード02が撃墜された、繰り返す、ワイザード02が撃墜
された、反撃許可を！」

そして撃墜されていく仲間

「ダメだ、日本の領空内ではない、反撃は許可できない、繰り返す、
反撃は許可できない」

そして非常な上司

何故、こんな場面が見える、確かに転生する前の記憶はおぼろげだ、
むしろ自分の名前とかバイクとかしか覚えがない。

何故だ？何故こんなにも自分は無力なのか？

守らなければいけないものがあるのに！

そして夢から覚める。

時間は午前5時、息は乱れ心拍は通常よりもずっと乱れている。

仕方ない、ちょっと早いけど走ってくるか。

俺の日課は朝5時15分から30分ほどランニングをしてくること
だった。

だっ広い学園の敷地を一周するのである。
もちろん全力で。

まだ寝静まっているので寮からでるまでは隠密行動である。
ほら、セキュリティがかかっているから窓からでる。

その後はいつも通り走って・・・いやちょっと遠回りをしてこよう
かな。

—25分後—

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

日課のランニングを終えた後ちよっと歩いて疲れをとる。

「毎日ご苦勞なことだな、赤城」

歩いてると立木の陰から織斑先生の声がした。

「日課ですからね・・・疲れててもやります」

立ち止まって返事をする

「まだ玄関扉はロックされているはずだが？」

確かに、玄関の扉は6時からしか開かない

「窓は自由ですから」

そういつて僕は歩き出した

「・・・それもそうか」

後ろの方で織斑先生がつぶやいたのが聞こえた

部屋に戻ってシャワーを浴び制服に着替える。

P i P i P i

「メール？」

F m .. のほんさん「k i t u n e — c o n c o n @ S a n L e x

a r . n e . j p

タイトル… F w … パーティー

添付ファイル… ナシ

本文… 本日午後5時より織斑一夏クラス代表就任記念パーティーを
食堂で開催します。多分皆さん暇だと思うので参加してくださいね
(^ - ^) b でわでわ

「暇か・・・」

さて、今日も騒がしい一日が始まるか・・・。

朝の S H R

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりで良い感じですね」

と山田先生がクラス代表の決定を告げていた。

「先生、質問です」

とてを上げたのは一夏

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたのに何でクラス代表になってるんですか？」

「それは・・・」

「それは私と翔さんがが辞退したからですわ」

山田先生が言いかけたところでオルコットさんが割って入った

「まあ、一夏は俺に勝ったしね。戦術バリエーションさえ良くなれば第4世代のパワーで押せるんじゃないか？」

多分それでいけるだろう。

「それとですね・・・その翔さん、先日のご無礼を申し上げました事をお詫びいたします」

なんか改まって謝られた・・・

「気にしてない、それに言うのなら時間と場所をわきまえた方が良いと思う・・・」

ほらあの三国志の英雄、織斑先生がね・・・
バコンッ

いつそう鈍い音が教室に鳴り響いた。

3時限目「IS実習」

織斑先生が整列した俺たちの前に出る。

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実戦してもらう。赤城、織斑、オルコット、デュノア、試しに飛んでみる」

指名された・・・

「はい・・・」

「分かりましたわ」

「はい！」

俺、オルコットさん、シャルルの順な、一夏は返事ナシ
オルコットとシャルルは即座にISを展開

俺はね・・・とりあえず第一形態で展開、その後はまあ状況に応じて第二形態に。

「セットアップ、ミラージュ・ランサーF1」

一夏は・・・遅れてるなまあ仕方ないか昨日の今日だし。

「よし！・・・うーん、えっとお・・・あれ？」

なかなか展開しない。もたもたしてると関羽・・・じゃなくて織斑先生に

「どうした？何をもたもたしてる、早くしろ。熟練したIS操縦者なら展開まで1秒とかからないぞ」

ほら言われた。でもこの人容赦ないよな・・・実の弟でも

「・・・集中・・・来い！白式！！」

やっと一夏を粒子が包み白式が展開する

「・・・よし、飛べ！」

織斑先生の声で俺たちは飛び立つ

出力的に優れるのは白式＞ミラーージュ＞ブルー・ティアーズ＞リヴァイブの順になるはずなのだが一夏はやはり不慣れなせいかな最後尾を飛行中

「遅い、何をやっている！スペックでは白式の方が上だぞ」

通信回線から一夏にお怒りの一言が・・・やっぱりあの担任容赦ないな

「自分の前方に角錐を展開させるイメージ・・・うーんよくわかんねえ・・・」

なんだよそれ・・・と思うのは俺だけ？

「俺はISを自分自身の体だと思って動かしてるからなあ、イメージと言われても普通に右手を動かすとかのイメージと変わらないぞ」
バードスウィッチ
外骨格と言うよりも体の一部といった方が良いのかもしれない。

「僕もそこまでとは思わなかったな・・・」

なんかシャルルに呆れられた・・・。

「一夏さん、イメージはしよせんイメージ、自分のやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

なるほど、確かに建設的ではある。

「だいたい、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ？これ」

あー一夏にはそう言う事を理解する機会が少なすぎたって事らしいな
「まあ頭で分かっているけども理解していないからじゃないか？まあわかりにくいって言うのが一番の問題だが」

見るだけで頭に入ってくるとかじゃないしな

「その、よろしければ放課後に指導して差し上げますわよ」

あー原作的にはその流れなんだよな良かった俺に向かなくて・・・

というか先日あの宣言はやめてほしかったな。いやS H Rの後平謝りに謝られて半泣きになり・・・なだめるのが面倒だった。

その頃、学園に転校生が来ていたことをまだ俺たちは知らなかった。
A C T. 15へ続く

ACT. 14 「転校生は専用機持ち」 #1 (後書き)

ご意見・感想お待ちしております

ACT. 15 「転校生は専用機持ち」 #2 (前書き)

どうも1週間が8日になってしまった作者です。
なので1日ずつ投稿が遅れております。

ACT. 15 「転校生は専用機持ち」 #2

転校生は置いておくとしてアリーナ上空にいる専用機持ち4人は次の指令を受けていた。

「よし、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は5?だ」

まためんどくさいことを……

「じゃあ俺は先に行くぞ」

そう言って俺は機体を右にロールさせて背面状態で降下開始

「制動開始位置まであと5. . . 4. . . 3. . . 2. . . 1. . . 0」

バックスの表示が0になると同時にブースタと尾翼が半自動制御で最適な制動をかける。

「制動完了、現在完全停止中です」

「モードリリース。Fモードに移行」

「Fモードに移行します」

飛行のために出ていた多方向推進翼が格納されスッキリとした外観に戻る。

面倒くさいことに神経使ったな. . . なんて思いながら俺の後に降りてくる専用機持ちを観察する。

オルコットさんが降りてきて、次はシャルルか. . . 。

まあ流石は代表候補生って感じだな。
ちゃんと止まるしね。

さてさて. . . 一夏はどうか. . . と思って一夏の方を向いた瞬間
ドーン！

という音と共に砂埃が空高く上がる。

「痛いぞ、アレは・・・」
顔面から突っ込んだみたいだし。

「・・・一夏！」

そう言って飛び出していく篠ノ之さん
そして

「織斑君！」

山田先生も様子を見に行く

あ、一応織斑先生も行くんだね
俺？ まあ一応行っとくか心配ではあるし。

砂埃がはれた後にはどでかいクレーターが形成されていた。

流石はシールドバリアーが守っているだけあって白式には傷一つ無い・・・というか汚れもない。

「痛ってー・・・死ぬかと思った」

一応無傷の一夏を見て不安そうだった篠ノ之さん・山田先生の顔が
ゆるむ。

「馬鹿者、グラウンドに穴を開けてどうする」

織斑先生・・・ちよっとは一夏に優しくしても罰は当たらないと思う
うよ？

「すみません・・・」

一夏がいったん上昇、クレーターから上がってくる。

そしてさっきまでは緩んでいた篠ノ之さんだったのだが

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっтарう」

昨日・・・えーっと「地上の少し手前でこうスパッと止まるんだ」
ってアレか。

一夏は何を考えているのか難しい顔をして篠ノ之さんを見る。

「貴様、何か失礼なことを考えてるだろう」

その顔だけで分かるのか・・・幼なじみ恐るべし。

「大体だな、お前という奴は昔から・・・」

小言が始まるうとしたとき篠ノ之さんを押しのけるようにして一夏の前に現れたのは

「大丈夫ですか？一夏さん。お怪我はなくて？」

「あ、ああ、大丈夫だけど・・・」

「まずは恐怖心の克服かな？基本的に俺とシャルルが教えてるのは銃器と格闘戦だけだし・・・どう思う？」

俺の横に降りてきたシャルルに聞いてみた

「そうだね、やっぱり恐怖心の克服も重要だけどまずは座学を・・・」

いや、一夏が補修にならない程度能力を与えるためにシャルルと俺は一夏に1時間ほどの座学を教えている。

そんな頃を考えていたら

「この猫かぶりめ!!」

「鬼の皮を被っているよりはマシですわ!!」

と篠ノ之さんとオルコットさんで口論になってました・・・。

その後武装展開の実習では一夏がオルコットさんに睨まれてたし・・・。

謎だよね女の子って。

アリーナからの帰り道でシャルルに

「翔はどうする？僕はこのまま教室に戻るけど」

「俺はちよっと専用機の調整をしてくるわ。今日のデータを見る限り想定機動力の75%くらいしか発揮できなかったからその原因を

確かめたい」

ついでにデータも送信したいし。

「分かった、じゃあ先に行ってるね」

調整と行っても特殊な工具を使用する訳ではなく整備室のモニタリングシステムを活用したかったただだからである。

「やっぱりバイパスの取り回しだよな。処理速度は想定よりも高い値を示してるから良いとして・・・」

現状ではアラを探して修正、またアラが出るから修正の繰り返ししかないからな

「システムは最適化されていますし、やはり後は高機動時のテストをしてみないと何とも言えませんね。今のところ私よりも機動型の方向に振っている機体ですので私のデータは使用しない方が得策かと思います」

とりあえず、新型装備の開発は急務だな。Vランスのバリエーションもほしいところだし・・・博士にお願いするか

部屋を出ようとしたとき

1機のISが目にとまった。

「実習機にしては変だな、ずっとおいてあるわけないし」

「打鉄式式、日本の第2世代ISです。開発元は倉持技研ですが・・・白式の開発のために開発が凍結されていたと聞きますが」

ボックスがデータベースにアクセスして情報を引っ張ってきた。

「ちょっと弄ろう、こんな素人みたいな機体じゃあ空中でバラバラになる」

打鉄式式にアクセス。

「了解です、同じISとしてもこれは改良していただきたいと思っていました」

ボックスが計算する最適化データと現状データを組み合わせ不良セ

クターを調整する。

「とりあえずはまともに動くようにはしたぞと・・・、でもやっぱ第2世代の壁を越えるには・・・」

「第3世代では面白くありません。いっそのこと第4世代クラスのを組み込んでどうですか？」

俺はその提案を了承。第4世代技術であるハイパーマルチロックオン機構（ロックオンできる基数は無限）、展開装甲などを組み込んでいく。

さらにアンロックユニットにエネルギー翼を追加、そしてブラックバードやミラーージュと戦術リンクできるフェニックス・デジタルーLに対応させた。

「まだやりたいことはいっぱいあるが、まあこれだけ直せば待機状態にも戻せるだろう」

「あの・・・」

実は半分ほど午後の授業に出ていない。

ん？なんか声が聞こえたような

「私の機体にさわらないで！」

私の？じゃあこの機体の調整は彼女が行ってたわけ？

「・・・死にたいのか？」

このままでは誤作動を起こしてしまうかもしれない回路、そんな回路を造る羽目になった訳を聞かずにはいられなかった。

「え？」

「何であそこまで極端なセッティングができる？ISの寿命を縮めて、最悪お前も死ぬぞ」

自分の調整のどこが悪かったか分からないようなのでわかりやすい図を用いて説明する。

数十分後

「つまりこのバイパス関係が偏って流れていてちゃんとエネルギーが回ってなかったわけだ、これじゃ待機状態にも戻せない」
「やっこの思いで操縦者を説き伏せて説明を聞いてもらっているとき・
・ドアがあけはなたれて

「本校舎1階総合受付ってどこにあるのよー!!!!」
「といらいらした声と共に嵐が来た。

「そ・・・総合受付？」

ACT. 16へ続く

ACT. 15 「転校生は専用機持ち」 #2 (後書き)

作者「予想外に速い登場でしたね打鉄式は」

一夏「翔って整備というか開発関係もできたんだな」

作者「アレだよ、あのウサギさんのラボにいるんだよ。整備や開発ができないでどうするの？」

一夏「なるほど」

作者「今回から他の小説と同じように後書きで雑談することにしました」

一夏「何で俺なんだ？」

作者「君なら余計なことと言わないタイプでしょ？ ツツコミとかツツコミとか」

一夏「なるほど。それで台本に余計なことは喋らないでくださいって書いてあるのか」

作者「あ、調整室にいる翔が怒ってる」

一夏「さてさて、ところですね。基本的にアニメ版と小説版が混ざってるんですか？」

作者「一応は原作基準なんだけど面倒な部分はスルー」

一夏「だって福音の件とかシャルルとのイベントとかは？」

作者「大丈夫。君にはシャルルとのイベントは来ないけど別のイベントが追加されるから」

一夏「死なない程度でお願いしますよセンセイ」

作者「だってこの作品はi fの世界なんだからね」

一夏「さてとそろそろお別れのお時間になってしまいました」

作者「次回は「転校生は専用機持ち」の#3をお送りいたします」

ご意見・感想をお待ちしています

ACT. 16 「転校生は専用機持ち」 #3

「とりあえず、あなたの端末にこの学園の地図と本校舎にある総合受付ルート入れましたんでこれで何とかたどり着いてください」

そう言ってその少女にスマートフォンを手渡すと

「ありがと、ところで貴方たち1年よね？」

切り返しの速い質問、切り替え速いね

「ええ、そうですけど」

「織斑一夏って何組分かる？」

一夏？一夏の知り合いか・・・それとも

「一夏なら俺と同じ1組だよ。ちょうどクラス代表になったけど」

そう言うとな彼女はいろいろ事案を巡らせたようだ
そして突然

「じゃあ、ありがと」

そう言うといってしまった。

残されたのは俺と打鉄式式の操縦者さんこと更識 簪さんだけになった。
った。

「明日は放課後に調整に来る予定だけど、嫌ならこれっきりで終わってもいい。だけど俺としてはもう少しこいつを調整したい」

嫌だと言われ手も文句は言えないけどね

「・・・簪」

簪さんはボソツと言った

「え？」

聞こえなかったので聞き返すと

「私の名前は簪」

そう言えば自己紹介してなかった。

「自己紹介まだでしたね、俺は赤城Ⅱポルシェ・翔、時々間違われるけど俺は一応イギリス人と日本人のハーフだ」
そうして俺は整備室を出た・・・のだが

「赤城、私の授業をサボるとは良い度胸だな」

えーっと陸孫？ いや孔明か？ いや織斑先生だった

「あ・・・すいません。そこでパンをくわえた女の子とぶつかりまして」

という80年代チックな言い訳を試みるが・・・

「そんな言い訳が通用すると思うか？ 馬鹿者」

ダメでした

その後、反省文を書いて・・・何とか生徒指導室から生還。

はあ・・・さて帰るか・・・

pipipi

「電話？」

「やつほーみんなのぷりていーアイドルの東さんだよー!!」

「あー、今日の機動試験の件ですか？」

「それもそうなんだけど久々にね・・・（ちよっと東博士!？この縄といってくださいよー、でもこの食い込む縄が・・・）」

電話の後ろから聞こえてくるのは圭ちゃんの悲鳴？ いや嬉しくて・・・
・変なことは考えないことにしよう

「はあ、と言うことは会えるんですか？」

「うん、とりあえず午後10時30分にバー・クレッシェンドで」
「了解です」

◇

あ：ありのまま 今 起こった話を話すぜ！

俺は織斑先生の生徒指導室から生還を果たし、部屋に戻ってきたと

思ったらシャルルに連れられて食堂に来ていたんだな……何を言っているのか わからねーと思うがおれも 何をされたのか わからなかった……頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ 断じてねえもっと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ……

そう俺は気がついたら織斑一夏クラス代表就任パーティーに来ていたのである。

それにしても女の子達はこういうイベント好きだよねそれは男装しててもシャルルは女子だしこういうイベント楽しそうにクラスメイトと話してるしね。

そして一夏は絶賛修羅場状態、ご愁傷様。南無三……唐変木・オブ・唐変木ズ。

「はいはい、新聞部です。噂の新生、織斑一夏君、シャルル・デュノア君、赤城Ⅱポルシェ・翔君3人の取材に来ました——」
修羅場に来たのは新聞部、流石新聞部だないいいカメラだ。

「あ、私は黛 薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺ね」

とりあえず新聞部の副部長の声だけしか聞こえないな。

「ところで織斑……そうぞ……」

さて、俺はちゃんと時間までにバーに着けるのだろうか？

A C T . 17に続く

ACT. 16 「転校生は専用機持ち」 #3 (後書き)

作者「さてと、おバカなOSのせいでなんと今日書いた分が全部ぶっ飛びました」

翔「なので時間がないので後書き雑談はごめんなさい進行で終了です」

作者「もう、ブログの更新とかしたかったけど無理だった・・・」

作者「と言うことで次回はもっと早めに上げる予定です」

ACT. 17 「転校生は専用機持ち」 #4

まだ織斑一夏クラス代表就任パーティーにいるわけだが・・・

一夏に一言だけ言って抜けるか？

「じゃあシャルル君にもインタビューをしようと思いまーす。織斑君のクラス代表就任に関して何か一言」

いきなりデジタルレコーダーを目の前に突き出されたシャルルは

「えーっと・・・頑張っって欲しいと思います」

無難な受け答えだな。よし俺もそうやってこなそう

「うーん、普通な受け答えだね。もうちょっと刺激的な受け答えが欲しいね。じゃあそんな受け答えができそうな赤城君、どうぞ」

ハードル上げられた！？

「じゃあ、エールだけ送つときます。鼠の気持ちではチーズしか得られない。大きい獲物を得ようとするなら狼の気持ちになれ。思い上がりは若者の特権だ」

うん思い上がりは若者の特権だからとりあえずね

「エールだけじゃなくてなんか意味深な一言だったね。つまらなかつた他の二人は適当に捏造するとして、赤城君のはそのまんまだそう」

オイこの記者大丈夫なのか？

この後は写真で大変なことになったがそれはまたの機会に語るとしよう。

ーしばらくして

「20時か・・・」

時計を見上げるともうそんな時間だった。

「どうした？なんか見たいテレビでもあったのか？」

ため息をついていたので一夏に気がつかれた

「え？ああちよっと用事があるし、俺がいても盛り上がりないだろ

うし俺は戻るよ」

そう言って俺はグラスを返却棚まで持って行った。

「そうか、じゃあおやすみ」

そう言った一夏に俺は右手を挙げて返事をした。

部屋に戻り私服に着替える。

ジーンズにTシャツ、バイクに乗るので革のジャケットを羽織り出かけようとしたとき

「どこ行くの？」

シャルルに見つかってしまった。というかどこにいた？あ、今戻って来たのか。

「ちよつと約束があるから出てくるよ、寮の門限までには帰れるから」

そう言って俺は出て行こうとするが

「じゃあ僕も付いていこうかな」

おいおい、生け贄は俺だけで十二分だよ……。その前に笑顔が怖いよ……。

「あまり見せても面白いもんでもないけど」

ダメって言っても付いてくるだろうな……。

仕方なく例の何でも出てくる段ボールこと四次元段ボール（仮）からヘルメットを取り出した。

下まで出ると

「ボックス、CBRを出してくれ」

「了解しました。次の給油までの推定走行距離は452？です」

ボックスのバススロットに格納されていたバイクが一瞬に現れる。

「まさかISのバススロットに入ってるとは思わなかったよ……」
バイクがあるとはいっていた物のバススロットに入れているとは思わなかったらしい。

「まあボックスは半自立型のISだからな、待機モードっていう觀念がないからもう言う使い方ができるだけだよ」

6速でクルージングするCBRは快適だ。元々の素性の良さによる物だが道路が良いというのも一理ある

「まあ2駅くらいだから15?くらい行ったところかな」
長い橋を渡り、だいたい100?／hで巡航する。

「バイクの扱いが上手いんだね」
シャルルに褒められたよ。そりゃあ（前世では）高校卒業後から7年くらい乗ってたし体が覚えていたのが嬉しかった。

ボックスのナビに従って市街地を走らせる。
なんというかナビの画面にボックスの出す地図だからギャップがどうもな。

しばらく走らせるとバー・クレッシェンドが見えてきた
「あそこのバーだよ、多分前にバイク止めても大丈夫そうだ」
この世界ではバイク駐車可という表示器の場所には店の前などに駐車スペースが用意されていたりするのだ。

ーカラン・カラン

入り口のベルが乾いた音を出す
しつとりとした雰囲気の内店は以前とは違い閑散としていた。

「どうも、マスター。今日は人いませんね」

「今日は人身事故の影響でね、1時間以上止まったままだから仕方ないと言えば仕方ないけれど」
マスターは少し残念そうに答えた。

「それは残念ですね、ではいつものをお願いします」
俺はいつものレール・スプリッターを注文する。

※レール・スプリッター(Rail Splitter)
レモンジュース・砂糖・ジンジャー・エールを使用したノンアルコ

ールカクテルの1種。なお、ノンアルコールカクテルの中には、わずかにエタノールを含有したものもあるが、これについてはアルコール度数0%である。ちなみに翔のいつものものは通常のステア（軽くかき混ぜること）ではなくシェイクする。

「はい、砂糖はいつも通り2tspティースプーンでよろしいですか？」

1tspはバー・スプーン1杯分程。小さじ1杯。約5ml程度ね

「はい、それでお願いします」

マスターとは入学までの1ヶ月間に織斑先生に教えてもらい週3ペースできていたので顔見知りなのだ。

「かしこまりました。そちらのお嬢さんは何にいたしますか？」

流石マスター、一発でシャルルを女だと見るいたみたい・・・

「え？僕？・・・どうしよう。カクテルなんて飲んだことないし・・・」

女とばれたのはスルーなんだね・・・まあ私服出しいいか

「そうですね、彼女にはシンデレラをロング・カクテルでお願いします」

※シンデレラ (Cinderella)

オレンジジュース・レモンジュース・パイナップルジュースを使用するノンアルコールカクテル。翔の注文したロングカクテルでは（クレッシェンドだと）氷を入れ、パイン・スライスを飾りソーダで割る。

「かしこまりました」

しばらくの沈黙

ただマスターの振るシェイカーの音だけが聞こえていたが

「お二人さんだけで良いムードなんて私としては入りにくいんですけどね」

圭ちゃん登場。男の時は普通に接してくれるんだね

「ごめん、ちょっと見つかったちゃって連れてくるしか無くて・・・」

素直に謝ろう、俺が悪いんだから

「まあいいですけど、じゃあこの飲み分は翔さんの奢りで♪」

マジか・・・食事さえされなければ4桁行くことないし・・・オイ
オイちゃんと金持ってるんだからせこいこと考えないでおこう・・・。

そして3人での密会が始まった。ところで東さんは来ないのかな？

あの人の呼び出されたんだけど・・・。

A C T・18に続く

ACT. 17 「転校生は専用機持ち」 #4 (後書き)

作者「カクテル飲みたいな」

一夏「クルマなんだからノンアルコールな」

作者「俺はノンアルコールカクテルしか飲まないよ」

一夏「未成年だから？」

作者「一生禁酒するから」

一夏「いつまで持つのやら・・・」

作者「それは置いておいて唐変木君」

一夏「俺か？」

作者「他に誰かいるのか？」

一夏「扱いが酷いぞ」

作者「あの4人から誰を選ぶか決めたのかね？」

一夏「何の話だ？ トーナメントならまだまだ話的には先だぜ？」

作者「だから唐変木・オブ・唐変木ズなんだよ」

一夏「なんだよそれ」

作者「さて、裏話ですが実はこの小説書いてるときに家の仕事が終わってきても大変だったというw」

一夏「何やってたんだ？」

作者「洗車とクルマのスピーカー取り付け・・・」

一夏「それでやっと更新したのがいつもと同じ時間かよ」

作者「何だ、俺やればできるじゃん」

一夏「何というか残念だ」

作者「まあ明日のも3作品目の更新はもっと壮絶な結果が待ち受けてるかもしれないけどな」

一夏「とりあえず、俺が活躍する場面はまだか？」

作者「時間的に良い時間ですね。では次回をお楽しみに」

ご意見・感想をお待ちしています

ACT. 18 「転校生は専用機持ち」 #5

ーバー・クレツシエンド個室

圭ちゃんが来たと言うことで少し開発元との機密事項が発生すると言う理由を付けてシャルルには席を外してもらった。

「さてと、ではまずミラージュの機動試験からのフィードバックとブラックバードの高速飛行時における燃費改善作業に入ります。とりあえず作業できるようにしてください」

やっぱりツインドライブして無くてよかった。してたら束さんが出てきそうだ。

「バックス、機能限定モードで起動。右…ブラックバード、左…ミラージュ」

0.5秒くらいで展開は完了した。

「展開完了しました。システムを同期します・・・同期が完了しました」

システムを同期させればあとは圭ちゃんのお仕事だ

「ところで、後でちゃんと揉ませてくださいね？」
え？

「ナ・・・ナンノコトヤラサッパリ・・・」

嫌だよ？

「いやルート権限乗っ取って勝手にできるんで良いですけど、そうすると戻しませんよ？ご自分でやった方が得策かと存じますけど？」
この子は・・・後でちよつとね・・・

「悪魔あ・・・」

悪魔だよこの子・・・俺に女の格好で学園に帰れと？

「悪魔で良いですよ？」

ケロッと凄いこと言うよね。昔友人に見せられたアニメに出てきた

魔砲少女の某白い悪魔さんと同じ匂いがする

「分かりましたよ、後でね」

「翔、立場が弱いですから仕方ありません」

それフオローになってないよ

「まあ博士じゃなくて私が来た時点で諦めておくべきでしたね」
圭ちゃん・・・なんか性格が変わってない？

「ね・・・ねえ、東博士に縛られて性格おかしくなった？」

いや、なんか尋常じゃなく目がマジだったんですけど・・・。

今、俺は個室内に展開された医療用っぽいベッドの上で作業する圭ちゃんを横目にもうまな板の上の鯉状態

「まあ新しい自分にあったって事は否定しませんけどね。でも女の子の格好で攻めてくれるんなら受けますよ？」

ダメだ、コイツ・・・早く何とかしないと。

「ソ・・・ソウナンダ」

こんな無駄話をしていても仕事だけは確実に進んでいるんだよね
ヘッドアップディスプレイ上のシステムがどんどん変更されて更新
されていく。

ISの処理能力に助けられてそのアップデートをкаろうじて理解でき
るんだけどその速度はあり得ないほど速い。

「はい、終了。とりあえずこれでブラックバードは30%くらいは
燃費が改善したはず。元々のシステムがよかったせいもあるんだろ
うけどね。・・・そう言えば学園でまたなんかIS弄くってるんだ
って？ちよつと私も混ぜてよ？」

何でだろう笑顔が怖いよ？

一分後

「はー・・・面白い機体だね。だけどデータ不足かな・・・荷電粒子砲はこのタイプのデータはないから手探りだろうし、まあ暫定的に運用しても良いくらいのデータは揃ってるわけだし何とかなるね」
結局俺は打鉄式式のデータを圭ちゃんに公開した。
え？だって公開しなかったら前述の通りなりそうだったからさ・・・。

「じゃあ、つつがなく終了したわけだし・・・ご褒美ちょうだい！」
覚えてたのかよ・・・

「はぁ・・・ボックス、ツインドライブ・・・極性限定モード」
「シンクロシステム正常起動しました。ミラージュ ランサーF1 (FX/G2/CR-200)との同期を開始しています・・・同期完了しました、同期率は100パーセントです。機能を限定して簡易起動中です。しばらくお待ちください」
俺を粒子が包み込んで展開終了
目を開けると・・・

「ふわふわマシュマロー!!」
このセクハラオヤジ・・・じゃなかった、圭ちゃんだ・・・。
※このあと数十分間玩具にされました。

そしていつの間にか圭ちゃんが俺の端末から勝手にシャルルにメールを送ったらしく
「おじゃましまーす・・・」
シャルルが個室の入り口で呆然としていた・・・。
「えへへ、私だけマシュマロを食べるのはしのびないから来てもらいましたあ♪」

・・・来てもらいましたあ♪じゃねえ・・・

「もう煮るなり焼くなりどうにでもしてよ・・・」

結局シャルルは泣き出すわ俺が圭ちゃんを蹴ると圭ちゃんは喜悦を上げるわ・・・もうヤダゆっくりお酒が飲みたい・・・

一さらに数十分が経過した後

「じゃあ圭ちゃんは束さんが引き取って帰るね。じゃあねー」

いつの間にかいた束さんが圭ちゃんを眠らせて（どうやったの？）引き取って帰って行った。

「ごめん、なんかめちゃくちやになっちゃった」

俺もだけど結構ゲンナリしているシャルルに謝る

「気にしないで良いよ。なんか良い経験になったし・・・」

とりあえずまだ門限までは時間があるのでもう一杯だけ飲もうとマスターのいるカウンターへ戻って来た

「マスター・・・もう少し強いビールはありませんか？」

・・・幻覚かな？織斑先生がやけ酒飲んでるだが・・・

「今夜はあまり良いお酒ではないですよ？織斑さん」

マスターも何だか心配そうな顔で・・・

「へーこういうお酒の飲み方するんですね。千冬さん？」

面白そうだったので・・・

「ん？赤城に・・・デュノアか・・・不純な同性の交遊に加えて飲酒か？」

腐っても教師だな・・・

「まあオフですからね。一応ここでアルコールを頼めるほど凶太い神経はしてませんよ。まあ知識として知っている程度と人づての情報でよければオススメの麦酒ビールを紹介しますが？」

麦酒ビールと言う単語が出たとたん千冬さんの目が変わった

「面白そうだな。頼もう」

何というかシャルルをおいて行ってる・・・

「マスター、シャルルには先ほどと同じシンデレラを、千冬さんにはモートサビットのカシスをお願いします。僕はいつもと同じ物を」

※モートサビット・カシス

ベルギー産のフルーツビール。アルコールは約4・5%。甘みが少なく飲みやすい。カシスの深い甘味のフレーバーを出す。ビールというよりもフルーツスパークリングのような飲み口。国内での流通量は多くない。

「なかなかいけるな、今度また頼むとしよう。ところで赤城」

「はい？」

「門限だけは守っておけよ？」

おっと・・・

「ええ、分かってます」

シャルルに困ったと言う表情を見せたら

「やっぱり先生だね・・・」

と同じような印象だったらしい。

とりあえず1杯だけカクテルを楽しみシャルルと俺は門限が迫るの
で寮に戻らなければいけない。

「では、俺はそろそろ時間なので帰りますね。マスター、お勘定を
お願いします」

・・・あー帰りのバイク疲れそう。

ACT. 18 「転校生は専用機持ち」 #5 (後書き)

一夏「今回は作者が多忙（逃亡）のため雑談はありません」
翔「誠に遺憾ですね」

一夏「でも、作者に遺憾の意を表したところでな・・・」
翔「とりあえず更新してるだけ良いでしょう」

ご意見・ご感想ご感想をお待ちしています

ACT. 19 「転校生は専用機持ち」 #6

翔side

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

翌朝、クラスにつくなりクラスメイトに話しかけられた。

「転校生？こんな時期に？」

一夏の言う通りまさに「こんな時期」なのである。まだ4月だ。元々入学の意志があったシャルルとは異なり転入してくると言うのはいったんどういう風の吹き回しなのだろうか。

「それって国家代表とか？」

IS学園の性質上、個人の意志での転校は不可能に近い。国家の推薦がなければとても転校などという暴挙には出ないだろう。

「うーんとね。国家代表じゃないけど中国の代表候補生らしいよ」
代表候補生ね・・・そういえば

「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

オルコットさんがいましたね。いつも通りの腰に手を当てたポーズがまぶしいですね（棒読み）。

「このクラスに転入してくるのではないのだろうか？騒ぐほどのことでもあるまい」

そそくさと自分の席に着いていたはずの篠ノ之さんが一夏の横に立っていた。

「どんなやつなんだろうな」

一夏はどうやらクラス全体もしくは学園の生徒全体を恋愛対象にする気はないらしい。でなければただの・・・。

「一夏はやっぱり気になる？」

変なことを考えてるうちにシャルルが一夏に聞いていた

「ん？ああ、少しは」

おそらく強いとか強くないとかのレベルで気になるんだろう。どんな女子かということは考えていないらしい。

「一夏はクラス代表だから気になっても仕方ないと思うが、俺はどうでもいいや」

フォローは入れるが、本音は「俺に絡まなくても面白いことはたくさんあるから。頼むからこっち来るな」いや、俺に関わると今度まづいことになったときに守らなくてはいけない可能性が出てくる。それだけ俺の周りにはゆがんでるからだ。

「一夏、おまえは女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そうですね、一夏さん。クラス対抗戦に向けより実践的な訓練をしましょう！相手ならこの私、セシリア・オルコットが任務めさせていただきますわ」

篠ノ之さんとオルコットさんの売り込み合戦が・・・昔のF-X選定を思い出すな。

※F-X選定^{えふえつくすせんてい}

Fighter-Experimentalの略称で、日本国航空自衛隊の次期主力戦闘機導入計画を指す略語。

まあ俺とシャルルは射撃もしくは飛行関係を一夏に教えてるわけだが、まあ筋は良いよ。

ただね、感覚派の篠ノ之さんとデータのみのオルコットさんと・・・そんな指示でわかるか！と俺が思う指示を出すので一夏は大変だと改めて思うよ。

「まあ、一夏にがんばってもらえばクラスみんなに特典がつくわけで、頑張っただけいいところではあるわな」

そう、クラス対抗戦では学習スタート時点の實力目標作りとして開かれるのという建前だが実際はクラス単位での交流と団結のためのイベントという側面を持っている。

もっともやる気を出すためにさっきも言ったとおり1位のクラスには優勝賞品として学食デザートの半年フリーパスが支給される。

「確かにそれは魅力的だよね」

シャルルもまあそういうの好きだよね。

「まあ、やれるだけやってみるさ」

一夏がまた適当なことと言って地雷を踏んでるな・・・

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんか！と！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする！」

「織斑君が勝つとクラスのみんなが幸せだよ！ね？赤城君？」

ほら地雷を踏んだ・・・って俺に振るのかい

「そーです」

オルコットさんたちは好きだろうけどね、俺はあんまり甘いものが好きじゃないし。

「織斑君、頑張ってね」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って1組と4組だけだから余裕だよ！」

4組か・・・ああ、簪さんか

「だけど、例の転校生って専用機持ちの国家代表候補生なんだろう？もし替わられでもしたら・・・」

「悪いけど手遅れだよ！」

俺の声を遮ったのは・・・昨日の迷子もとい例の転校生？だった

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

昨日は暗くて気がつかなかったがあの子、日本人じゃないな。雰囲気が違うが・・・しかし日本は初めてですって顔じゃないな

「鈴・・・？。お前、鈴か？」

「そうよ。中国の代表候補生、凰 鈴音。今日は宣戦布告にきたっ

てわけ」

一夏の知り合いか・・・道理で疊化して見えるわけだ

※疊化^{たたみか}

外国人の日本化をさす言葉。

例

・肩がこったからシップを貼ろうと思ったとき（外国には肩こりの概念が無い）

・本のカバーをかけてもらうのが当たり前になったとき、

・外国人をみて「あ、外国人だ」と思ったとき、

・タクシートのドアが自動ドアだと思っているとき（海外のタクシーは自分であける）

など

「何格好つけてるんだ？ すごい似合わないぞ」

おいおい一夏、久々？ 似合った友人にそれかよ

「んな・・・！？ なんてこと言うのよ！ アンタは！」

ああ、こいつら幼なじみか何かか？ 後で神様に連絡とってみよう。
そして原作借りよう。

「おい！」

「なによ！」

ああ、一夏が言いたいことがわかった。

ACT・20に続く

ACT. 19 「転校生は専用機持ち」 #6 (後書き)

一夏「おお、ちゃんと今日上がってる」

翔「その代わり作者が過労でもう寝るってさ」

一夏「パソコンの更新して小説の更新とはご苦労様、作者！」

翔「いや、昨日遊びに行かなければ今日ちゃんと俺たちが掲載されてオトボクの人たちも万々歳だったんだがな」

一夏「まあな。ところで今日はゲストがきています。翔当ててくれ」

翔「そんなの乙女はお姉さまに恋してるゝ群青の君ゝ主人公、鷺宮

歌織嬢だろ？」

一夏「なぜわかったし！？」

翔「俺の目の前におるからだ。お前の目は節穴か？まあ作者よりもマシか」

歌織「ひどい批判だね。まあ同意しなくもないけど」

一夏「さて、歌織さんがきたと言うことは？」

歌織「ちゃんと小説が上がっているかどうかの確認よ」

翔「やっぱり気になる？」

歌織「そうね、私たちのせいで貴方たちに迷惑をかけてしまったんだもの。謝りに来たというのもあるわ」

一夏「それは気にしてないので大丈夫です！」

翔「まあ作者だし。こんな事があるとは思ってたから良いよ」

歌織「ありがとうございます」

翔「さて、せっかく歌織嬢にきていただいた訳なので！」

一夏「歌織さんのIS適正を計測してみます！」

歌織「そんな話聞いていないのだけれど・・・」

翔「調整室にいる優雨さんがOK出してるんで大丈夫です」

一夏「直ぐ終わりますので」

（Now測定中）
ピン

翔「測定結果は・・・おい、一夏・・・」

一夏「まさか・・・これは」

歌織「そんなに高くはないと思うのですけれど・・・いくつでした？」

翔「まさかのSランクです！」

一夏「確かSランクって「ヴァルキリー」「ブリュンヒルデ」級の数名と翔だけだったよな？」

翔「これはもう乗ってもらえないかな。誰か専用機作ってもらおう」

一夏「よし、俺、東さんに頼んでくるわ」

歌織「け・・・結構です・・・」

翔「まあ後書きとか番外編の時に出てくれればそれで良いですよ。それまでにこっちで制作しておきますので」

歌織「は・・・はあ」

翔「さて、もうそろそろお別れのお時間となりました。今回も楽しんでいただけたら幸いです」

一夏「では次回であいましょう」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

ACT. 20 「転校生は専用機持ち」 #7

「おい！」

「なによ！」

ああ、一夏が言いたいことがわかった。

バシン！おお、今日も出席簿は良いキレですね。

織斑先生（鬼教官）の登場である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

さっきとは打って変わって完全に織斑先生に対してびびっている

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません・・・」

鈴音という女子生徒は織斑先生にびびってずこずこドアから退く

「また後でくるからね！逃げないでよ、一夏！」

そのときボックスの骨伝導スピーカーから

「翔、メールが届いています。表示しますので確認してください」
というメッセージがあったので腕時計の確認ボタンを押す

メガネの内側にメッセージが表示された。

F m..神様 [3-6 v1200mah@SanLexar.ne.
jp]

タイトル..転送完了のお知らせ

添付ファイル..ナシ

本文..持っていると便利だと思って贈ろうと思っていた航空戦艦型ラボの転送が完了したぜ。位置はボックスに登録してあるから確認すると良いぜ。それと原作欲しいなーなんて思っていると思ったのでそ

の中に図書館を作っておいたから探してみると良いぜ。

航空戦艦型ラボだあ！？まさかあの神様・・・裏で絶対東さんと繋がってるだろ・・・。

「とりあえず席に着きましょう」

ボックスに促されて席に着く

「ボックス、その航空戦艦の基本データを出してくれ」
小声でボックスに指示を出しデータを出してもらった
「了解です。メール表示部分をデータに置き換えます」

データ

全長…262.0 m

最大全幅…65.9 m

高さ…水面より50 m

排水量…72.809 t (満席状態)

最高速度…65ノット

最高巡航速度…58ノット

航続距離…(58ノットにて) 約1000000?

軸馬力…150万馬力相当

動力…超高精度超音波モーター

「これ絶対大和をベースにしたよね・・・50ノットオーバーで巡航できるとかどんだけ高性能なんだよ・・・」



さて、午前の授業も一段落し昼休みになったのだが・・・

「お前のせいだ!」

「貴方のせいですわ!」

篠ノ之さんとオルコットさんが開口一番、一夏に飛び出した言葉だった。

「なんでだよ・・・」

一夏よ南無三。自身の問題は自分で解決してくれよ?

「一夏、俺をそんな目で見るなよ。お前のせいなんだから仕方ないだろ?」

不満げな一夏をスルーしつつ

「とりあえず、ご飯食べに行こうか」

シャルルに促されて食堂に向かった。

今日は・・・日替わりAがアジフライで日替わりBがトンカツか・・・よし日替わりAだな

「待ってたわよ!一夏!」

どーんと現れたのは噂の転校生 凰 鈴音だった。

「まあ、とりあえずそこ退いてくれ。食券出せないし。普通に通行の邪魔だぞ」

一夏の正論に凰さんは分が悪くなった。

「う、うるさいわね!分かってるわよ」

数分後、全員食事を手にテーブルに着く

「一夏、そろそろ俺たちは説明が欲しいんだけど?」

「そうだぞ一夏、どういう関係なのか説明してもらおうか」

「一夏さん、まさかこの方と付き合っているの!?!」

上から俺、篠ノ之さん、オルコットさんな

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ・・・」

おーすごい動揺だな、まんざらでもないと・・・これは篠ノ之さんに頑張ってもらわないと束さんに殺されそうだな。

「そうだな。どうしてそう言う話になるんだ？ただの幼なじみだよ」

ただの幼なじみね・・・なんか

「・・・」

うん、やっぱり凰さんににらまれてるぞ、一夏。

「？ 何にらんでるんだ？」

凰さんの視線に気がついた一夏はやはりこういう返ししかないのか・・・この唐変木・・・。

「幼なじみ？」

怪訝な声を出したのは篠ノ之さんだった

「あー、そうだったな。箒が転校してっただのが小四の終わりだったろ？鈴が転校してきたのが小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、あうのはちょうど1年ぶりだな」

ああ、なんというすれ違い・・・。

「で、こっちが箒。ほら、前に話しただろ？小学校からの幼なじみで、俺が通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

一夏の紹介に対して凰さんは冷ややかだ。

「初めまして、これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

おおう・・・修羅場が見えたのは俺だけか？

この後、一悶着どころか二悶着やそれ以上の修羅場がおそってきた

ため

「一夏。俺、飯終わったからちよつと職員室に用事があるから行くわ」

そう言ってシャルルとその場を離れた。

いや、確かに呼ばれていたのも事実だがそこにいると俺の方まで飛び火してくると思ったからだ。

◇

シャルルは図書室で調べたいことがあるというので廊下で別れた。職員室で織斑先生への取り次ぎをお願いした。

「赤城か、お前の出生に関わる情報だがな、航空自衛隊の航空防空隊の殉職者の中からDNA鑑定において両親もしくはそれに近いレベルの一致があった。次の土曜日に行け」

そう言って渡された紙には航空防空隊東部方面隊資料局代々木資料室と書かれていた。

「代々木ですか？」

代々木か・・・

「そこに入江 武蔵2等空佐という人が入るその人に会ってこい」

※航空自衛隊・航空防空隊
こうくうぼうくうたい

航空自衛隊の新設部隊。防空に特化した組織でそのほかに航空救難隊・航空輸送隊などに分かれている。

「了解しました。では失礼します」

そう言って俺は職員室を後にした。

ACT・21に続く

ACT. 20 「転校生は専用機持ち」 #7 (後書き)

一夏「さて、今週はちゃんと上がってるな」

翔「うん、ちゃんと上がってる」

一夏「さて、ここで新キャラ情報です！」

翔「まさかここできるとは思っても見なかったな・・・」

一夏「プレゼンターとしてなぜか前回に引き続き、乙女はお姉さまに恋してるく群青の君く主人公、鷺宮 歌織嬢に来ていただきました」

歌織「気がついたらここに連れてこられてました・・・」

作者「私が連れてきました！」

一夏「run for money逃走○のハンター!？」

翔「焦るな一夏、この声は作者だ」

歌織「この人に追いかかれて・・・」

作者「いや、ただ単にオールバックにしてサングラスとインカム付けただけだよ？ハンター視線カメラは持ってないよ？」

歌織「そんな細かいのはいらないよ。それ以前に無言で追いかけないで、もうヤダ・・・」

作者「さて、それでは新キャラ告知をお願いします」

一夏「最悪だな」

翔「だね」

歌織「うう・・・。さて、登場時期としては確実に年内は不可能ですが予定ではラウラ・ボーデビツヒさんと同時期くらいの登場になる予定です」

一夏「どんなキャラとかそう言う情報は入っているんでしょうか？」
歌織「えーっですね、お会いしたところですね。結構クールビュ

「ティー菜感じだと思えます。目線は結構きついですね。ただ、かなりきれいな方でしたよ?」

翔「これは一夏にフラグかな?」

作者「その辺は未定だよ。まあそれはそれで面白いな」

一夏「フラグ?」

翔「いや、一夏は気にしなくて良いよ。俺と作者の問題だから」

一夏「? ああ、分かった。さて、作者さん、前回の測定で歌織さんのIS適性がとても高いという結果が出たのですが、その後の進展状況はどうなったのでしょうか?」

作者「はい、その件につきましては進展状況がございましたのでご報告させていただきます。歌織さんのISにつきましては正月企画と言うことで活動報告の方でご報告させていただきます」

翔「結局ここじゃあやらないのか?」

歌織「私としては別に・・・」

作者「ここでやるのは筋違いだからね。ちゃんとした場所を用意するよ」

翔「まあ、作者なりの配慮だろうね。歌織さんには心の準備の時間が必要だしね」

歌織「あんなすごい機械を使えるとは思えないのですけれど・・・」

作者「大丈夫です。一夏でも動かせるんだから平気」

一夏「ひどくないですか?」

作者「さて、もうそろそろお別れのお時間となりました。今回も楽しんでいただけたら幸いです」

翔「では次回であいましょう」

一夏「ひどいよね?」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6009v/>

IS インフィニット・ストラトス～ツインドライブの使い手～

2011年12月25日21時51分発行